

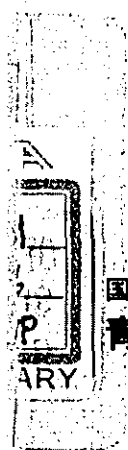
2678

海外協力の 現場から

モロッコ編

青年海外協力隊員
の記録

昭和55年3月



国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

JICA LIBRARY



1063116[6]



国際協力事業団	
受入 月日 584. 5. 248	41190
	(369)
登録No. 07395	JVP

序にかえて

昭和55年3月

青年海外協力隊
事務局 長

黒河内 康

ここに、青年海外協力隊員の活動に関する報告書集をとりまとめ、協力隊事業に直接かかわりのある各位はもちろんのこと、日ごろから協力隊事業に深い関心を示され、ご支援を賜わっている多くの方がたの利用に供することができることは、私のまことに欣快とするところである。

協力隊員の活動は、開発途上国において国づくりにいそしむ人びとの“お手伝い”が目的である。時には、お手伝いでなく、自ら手を下してしまいたい誘惑にかられることがあって不思議はないし、事憎が許せば、それを排除するまでもない。しかし、多くの場合、「代位」ではなく「介助」であり、もどかしさはもちろんのことだが、いろいろ屈折した感情が累積することもある。

その中で、より一層、途上国の人びとの中に融けこもうとし、協力手法を改善充実しようと悩み、工夫している過程から生まれた報告書は、貴いものである。報告書に書かれていることはもちろん、書かれなかったことについても。

この報告書集に収録したものは、そうした数多い隊員の報告書の、ほんの一部分にしかすぎない。協力活動の側面も限られているところがある。統編にその補充を期待したいと思うが、読者各位におかれては、この報告書集を手がかりに、協力隊員の活動の問口と奥行きが大きく、かつ多様なことを推察していただきたいと念じている。

協力隊員の技術・技能は、水準が高いだけでも充分でないし、日本式の技術移転で成功するとも限らない。技術・技能をもった協力ボランティアにしてはじめて、途上国の技術・技能の中堅層の育成につながる手法や径路が生まれると信じている。teacher of teachers として、あるいは trainer of trainers として活躍できるよりは、1対1のカウンターパート養成に終わることもあることに、南北問題のむずかしさがある、と感じとっていただければ、幸甚である。

この報告書集では、関係職種の協力隊技術専門委員の方がたのアドバイスをいただいて、隊員(OB)の追記と合わせて掲載した。現在活躍中の隊員はもちろん、これから協力隊に参加しようとする青年諸君にとって裨益するところ多いと確信する。ご協力いただいた各位に感謝の意を表したい。

モロッコ編

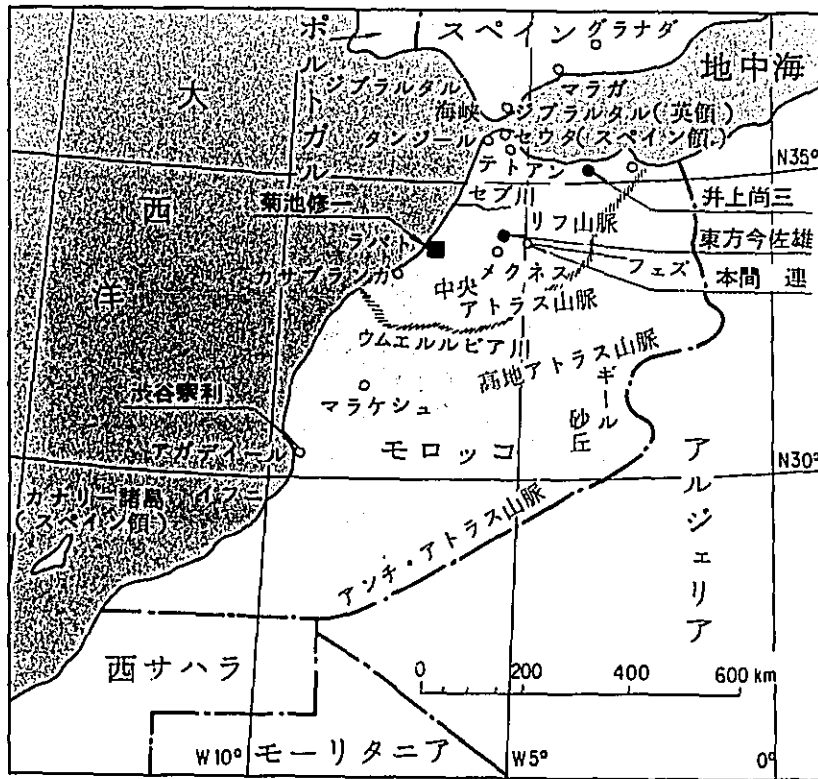
目 次

序にかえて	黒河内 康	(1)
I 外国人専門家と共に測量現場へ	本間 速	(5)
本間隊員の報告書を読んで	布施 進	(11)
II モロッコ養蚕業の将来を考え続けた日々	東方今佐雄	(13)
日本に帰って考えること	東方今佐雄	(22)
東方隊員の報告書を読んで	田澤四郎	(25)
III 農獣医科大学の公衆衛生研究室にて	菊池修一	(29)
菊池隊員の報告書を読んで	松山 茂	(36)
IV イスラム社会で得た貴重な体験	井上尚三	(39)
日本に帰って考えること	井上尚三	(47)
井上隊員の報告書を読んで	江崎 要	(49)
V オアシス農業地での "Une petite proposition"	渋谷宗利	(53)
日本に帰って考えること	渋谷宗利	(59)
渋谷隊員の報告書を読んで	布施 進	(61)
あとがき	高橋成雄	(63)
(付) モロッコと協力隊		(2)
モロッコの略図と概要		(3)

モロッコと協力隊 (昭和55年3月1日現在)

最初の隊員派遣：昭和42年9月								
職種部門	農林水産	製 造	保守操作	土木建築	保健福祉	事務文化	教育訓練	合 計
派遣中	6		6	16	2 (2)		4	34 (2)
実 績 (累 計)	67		8	66	2 (2)		7	150 (2)

(注) カッコ内は女性隊員。



モロッコ王国概要

面積：458,730平方キロメートル(西サハラを除く)(日本の1.2倍)
 人口：1824万人(アラブ人65%、ベルベル人35%、77年国連推定、
 人口密度：39.8人/km²)

宗教：イスラム教

公用語：アラビア語

1人当たりの国民所得：440ドル(75年国連推計、日本4,937ドル76年)

通貨：ジルハム、1米ドル=4.10ジルハム(78年7月)、1ジルハム=約61円

首都：ラバト(70万人、73年推定)

元首：ムーレー・ハッサン2世

主な輸出品：リン鉱石



外国人専門家と共に測量現場へ

報告書 (53年5月～53年12月)

54年1月15日記

派遣国 モロッコ 50年2次前期組

職種 測量

氏名 本間 連

配属先 Service de l'Equipement
Direction Provinciale
de l'Agriculture de FES

本間隊員の略歴

氏名：本間 連

生年月日：昭和25年8月16日

出身県：長野県

職種：農業土木

派遣期間：51年2月～54年2月

任期延長後のこれまでの協力活動について、ここにまとめて報告いたします。

I 担当プロジェクト

主に担当したプロジェクトを列記してみると次のようになる。

1. 5月, 6月
Missour (ミスール) 地方, Boukharfa (ブーカルファ) 村一帯の灌漑用ダム建設予定地の調査, 地形測量, 図面作成。
2. 7月初旬
S.E. (Service de l'Équipement) が測量会社に発注した, Fès 郊外の上水道用パイプ管埋設のための測量, 図面, 現場チェック。
3. 7月中旬
Sefrou (Fès より南に約 30 km にある町) 近郊にある既設灌漑用ダム付設コンクリート水路工事のための地形測量。
4. 8月, 9月
夏期休暇, ラマダン (断食月) のため仕事なし。
5. 10月~12月
灌漑用ダム建設予定地 Brija (ブリジャ) から, Boukharfa 村までの水路建設のための路線, 選点調査, 路線計画予定地地形測量。
6. 11月
S.E. が発注し, 測量会社が行なった, Guigou 村 (Fès より南に約 100 km) 一帯灌漑計画のための, 写真測量による, 計算, 図面, 現場チェック

II カウンターパートについて

モロッコ赴任以来, カウンターパートがいないという問題があった。その理由として二つあるが, 一番目として実際には私の赴任時において, S.E. に約 5 年勤務のフェラジ, 2 年勤務のヒラリーという二人の測量技術補がいたが, S.E. のシェフ (課長) は, 測量技術補それぞれに異なったプロジェクトを担当させるという方針をとっており, 二番目として, Missour 地方は Fès から遠く, 出張した場合, 村に数日間滞在しなければならず, 生活条件もあまりよくないということで, A-T (測量技術補) 達が出張しなくなるからであった。

このような中で, 私は主に, 外国 (ポーランド, アメリカ, ブルガリア,

エジプト)からの技術協力の水路設計専門家の担当するプロジェクトの仕事、特に、ポーランド人コルシャウィク氏と共に、Missour 地方の仕事を行ってきた。そのために、A-Tと共に同じ現場で働くということは、2年間、ほとんどなかった。

当初、現場で働いて一番困ることは、コミュニケーションの問題であった。私の場合ほとんど、現地の村の人々を3人くらい人夫として雇ったが、彼らは測量をするのも初めてであり、フランス語はもちろん通じないので、仕事の方法(ポールのもち方、たて方、テープのもちかた等)を理解するまで説明するのに大変苦労し、時間もかかり、また説明した通りに、杭の上に正しくポール、箱尺をたてることができなかつたり、杭をまちがえたりするので、そのたびに気を配って、すべてに注意していかなければならなかった。

また前のレポートにも書いたように、長期滞在は体にもあまりよくないので、仕事を早く終らせるために、1日中働くようにした。このような状況をシェフに報告し、もし一人の測量を知っている技術者をカウンターパートとして私につけてくれれば、コミュニケーションの問題もなくなり、A-Tの測量技術も共に働く中で向上し、仕事の能率もあがると提案し、要望したが、なかなか受けいれられず2年間が過ぎてしまった。

1977年秋に、それまでS.E.の仕事をするかたわら、Fèsの経済学部
の学生として大学に通っていたA-Tのヒラリーは、勉強の都合のため
Rabatに移り、それと前後して、A-TのMr. アブジジ、1年制測量学
校を卒業したばかりの女性Agent Technique(技術助手)Mlle アチカ
がFèsのS.E.に配属された。

この機会を通して、再び、カウンターパートをつけてくれるよう相談した
結果、Mlle アチカを私のカウンターパートとしてつけてくれ、また、
Missour 地方の現場においてはMr. アブジジをつけてくれるようになった。

Mr.アブジジは78年10月に、大学入学資格試験に合格し、Fèsの経
済学部に通いながら、S.E.の仕事をしている。彼の技術面においては、2
年制測量学校卒業後、AgadirのS.E.で働き、そこで元協力隊員の関さん
と共に働いていたが、後にKénitraのS.E.に移り彼のやり方で仕事をし
てきたため、水準測量をするにも往復測量をせず片道だけで、また距離測量
にも間違いがあつたりであるが「少しくらい精度が悪くとも、それでも工事
後は水路に水が流れるから、往復測量の必要はない」ということと、「モロ
ッコ人のA-Tが担当する設計、施工にはそれほどの精度を必要しない」とい

モロッコ I……外国人専門家と共に測量現場へ

いう理由で、あまり問題もなく、気にもせず働いてきたようである。彼と共に現場で働くようになって、彼の仕事方法、技術力、欠点がわかったので、水路設計の専門家の担当するプロジェクトの場合、 $I = \frac{0.3}{1.000}$ (1 kmにつき 0.3 0 m の勾配) で水路を設計するのが多いので、必ず誤差を許容範囲の中に収める精度、また往復測量の必要性を彼に説明し、理解させてきた。

Ⅲ 農民の生活てみた事

Boukharfa の村に幾度か出張し、滞在することもあり、まず驚いたことは、電気もないのに 10 m もあるような長いサオにテレビのアンテナが取り付けられてあることだった。よく注意して数えてみると、村中で 7 本もそのようにしてアンテナがたてられていた。

どのようにしてテレビを見るかと聞いてみると、車用のバッテリーを二つ買い、そのうちの一つをテレビに使用し、電気がなくなった場合、週 1 回ある Missouri での Souk (市場) の日にバッテリーを充電させているとのことである。また、どんな山奥や砂漠の中にある小さな村にも日本製のトランジスタラジオがあり、私が日本人であると知ると、古くなってこわれている日本製ラジオをもちだしてきて、「日本人だから、これを修理できるだろう」と頼まれることが何回かあった。

Boukharfa の村にも一応、小学校はあるが、中学校になると Missouri まで行かねばならず、ほとんどの子供達は学校にはいけず、羊番をしたりして働いているが、それでも、往復、徒歩で 4 時間もかけてまじめに学校に通っている子供もいる。

Ⅳ 民間測量会社が行なった仕事のチェックについて

S. E. が民間測量会社に発注した仕事のチェックは、以前ほとんどなかったが、今回は 2 件あり、そのうち 1 件はこのプロジェクトの設計担当のブルガリア人 Mr. サポーフと共に現場に出かけチェックを行なった。

仕事は全体的にはよく出来ているようであるが、仕様書通りに石標を埋設してなく、また、コンクリートで固めてなかった。以前に、測量を正確にし、図面を作成し、設計が終っても、工事の開始がいつも 2、3 年後になるため、杭がなくなってしまうので、再び現場に、点をおとしなおすということからやりなおさねばならないことがしばしばあった。このためキチンと石標を埋設させるようシェフに報告した。また、もし再測量して点を現場におとす場

合、今の S. E. の測量技術補の技術では無理であると報告したところ、シェフの方から、もう1年ぐらい私が S. E. で働くように要請された。

もう1件は Quiqou の写真測量のチェックであるが、これは設計担当のポーランド人、Mr. コルシャウィク、Chef de bureau d'étude (設計室長) の Mr. グランディと共に行った。写真測量に伴う基準点の設置、三角測量、トラバース測量、水準測量等、非常に精度の高い結果を出しており、図面作成における少しのミスをのぞいては問題なかった。また測量器械も光測距儀をはじめ、最新型のものを使用しており、民間の測量会社の技術が S. E. の A-T の技術よりすぐれており、ずいぶん差があることを感じた。Fès の S. E. の A-T の技術では民間会社が行なった写真測量、計算などのチェックはできない。

V 後任隊員について

S. E. のシェフと後任隊員について話したところ、測量技術者を1名ほしいるとのことである。

私が初めて Missouri を訪れた時は、活気のない小さな町であったが、この3年間の間に市内の中央道路が拡大され、中央に広場もでき、植林もされ、役人の住居も多く建設され、見ちがえるような活気のある町になってきている。Fès のプロバンスであった sub-division de sud-Fès がかわかれ、新しく Province de Boulemane になり、県庁所在地が Missouri になったため、この町に投資している建設資金は多く、それに伴い Missouri 周辺にある村の灌漑計画が、今まで10年以上も懸案であったこともあり、現在、どしどし予算化され実行されつつある。

灌漑計画のほとんどは Missouri 付近を流れるモロッコで最長の Oued Moulouya (ムルルーヤ川) に小さな灌漑用ダム(幅約40~60m、高さ3~6m)を建設し、コンクリート水路を作るというものである。それに伴い、調査、測量の仕事は現在に引き続き相当するものと思われる。

ただし、すでに Missouri に新しい S. E. の事務所が建設されつつあり、80%が完成し、1、2年後には Missouri 地方の仕事は新しい S. E. が担当していくことになるであろう。現在は、誰が Fès の S. E. より新しい S. E. に異動するかという問題も A-T の関心の的のようである。

民間会社の仕事のチェックは内容的にも技術的にも高度のものが必要とされるので、これらのチェックの仕事は外人専門家と共に協力隊員が担当する

というようになっており、この面でも S. E. では協力隊員を必要としている。また、工事が始まれば、その現場チェックも技術的に協力隊員が行なうようになる。

このように Fès の S. E. では、仕事量でも、技術的な面においても協力隊員を必要としている。しかし、それはあくまでも高級技術者の穴埋めとして必要とされているのであって、協力隊活動で重要な「現地人への技術移転」ということはシェフは考えていないようだ。そのへんに協力隊員としての不満、悩みがある。

シェフがカウンターパートをつけてくれればよいが、もしつけてくれなければ、困難な仕事、高度な技術力を必要とする仕事のすべてを協力隊員が一人で行ない、他の測量技術補はなにもしないで事務所で雑談をしているだけ、という結果になりかねない。これでは開発途上国の自力更生のための協力活動が、反対に自力更生をさまたげるものとなり、「協力悪」になってしまう。実際に私自身、2年間、カウンターパートなしで働いてきた。

このように考えてみると、私後の協力隊員（測量）も、Fès の S. E. においては技術者の穴埋めとしての立場で働くようになると思われる。そのような中で、少しずつシェフと交渉しながらカウンターパートをつけてもらうようにしていくのが、よいと思われる。

本間隊員の報告書を読んで

布 施 進

本報告書は2ヶ年の任期終了後、さらに任期を延長して活躍中の隊員のもので内容は8ヶ月間に担当したプロジェクトの内容、着任以来のカウンターパートについての問題、作業間に接した農民生活の一面、民間測量会社の行った仕事のチェックの結果、後任隊員の予想される任務等について述べてあり、その活動内容、実施方法、物事に対する取り組み姿勢等、いずれについても適切なものと感じられる。なお項目について具体的に付言すると次のとおりである。

(1) 担当プロジェクトについて

夏期休暇とラマダンの8、9月の2ヶ月は仕事なしとあるが、その間の隊員としての仕事は全然ないのか、仕事がないとすると、隊員はどのような生活をしているのだろうか。

(2) カウンターパートについて

測量技術者にカウンターパートをつける目的は測量能率の向上とカウンターパートの教育であることは本隊員も納得しているとおりである。故に隊員にカウンターパートをつけるかどうかは受入機関の判断によって決定されるのは当然であり、本隊員に対し2ヶ年間の任期中にカウンターパートが配属されなかった事は、受入機関の事情によるものであろう。しかし本報告期間中の後半において配属される事になった事は本隊員の努力と受入機関側の本隊員に対する評価の結果によるものではないだろうか。次に配属されたカウンターパートの教育方法についてみると、測量は測量の誤りを防止し、精度を知る事が出来る方法で行うという原則に則っている事は評価すべきである。すなわち配属されたカウンターパートは測量の実技は出来るが測量の原則に反する方法で行っていたようである。水路設計等のために行う水準測量は高い精度を必要としないので往復観測の必要がないという考えでいたのである。これに対し片道観測では誤りの発見が出来ず、目標の精度の点検も行うことが出来ない事を説明し理解させたようである。なお水準測量で片道観測が許されるのは出発点及び閉合点の標高が既知な結合路線と、出発点と閉合点が同一である閉合路線に限ること

も徹底させるべきである。

(3) 民間会社の測量成果のチェックについて

設計用として行われた測量の成果を工事用の測量で使用するまでに2、3年の間隔があるとするれば、設計のための測量成果の内の主要な基準点等は、工事開始まで保存できるように処置するのが原則である。故にこれらの点の標識に石標またはコンクリート標杭を使用し、コンクリートによる根固め及び上面舗装等が一般に行われる。本隊員がチェックした測量においても仕様書で石標を埋設するように規定されている基準点に対し、石標が設置されていなかった事を指摘して報告した事は、検査者として適切な措置である。

(4) 後任隊員について

本隊員の交替として要請される要員の任務は設計に必要な測量を実施するだけでなく外注により作成された測量成果の点検、しかも空中写真測量により作成された地図の工程毎の点検も行う必要があるとすると、地上測量と空中写真測量の両方の経験者であることが必要条件となるであろう。しかし現在までの協力隊員の応募者層から考慮すると適任者を得る事は難しいように思われる。本報告書によるとモロッコ国における民間測量会社の作業能力が充実にしているようであるが、量的に今後増加する傾向があれば、現在まで隊員が行っていた測量のうち大規模のものは外注に移され、隊員の行う測量は小規模なものになり、隊員の任務は外注作業の点検作業が多くなるのではないだろうか。この作業を技術者の穴埋めの作業と考えるのは適当ではないだろう。受入機関でこのような作業について技術移転が必要と考えれば、当然カウンターパートをつけることになるであろう。しかしこれは派遣される隊員の技術能力と日常活動の評価の如何による事になるのではないだろうか。（青年海外協力隊技術専門委員＝測量）

モロッコ養蚕業の将来を考え続けた日々

総合報告書

派遣国 モロッコ 51年1次前期組

職 種 養 蚕

氏 名 東方 今佐雄

配 属 先 Station de la Sériciculture
d'AIN-TAOUJDATE

東方隊員の略歴

氏 名：東方 今佐雄

生年月日：昭和23年10月29日

出身 県：長野県

職 種：養 蚕

派遣期間 51年8月～54年2月

I 着任当初の心境

8月に任期延長をして以来、なんと、時間の過ぎるのが早かったことか。もう最終報告書を書く時期になってしまった。あと何日かで日本へ帰るわけだが、帰るのが、うれしいような、残念なような、なんとも複雑な現在の心境である。

2年間、この町の片隅みにいつづけたが、この家のまわりでもやはり、いろいろな変化がある。2年前、窓越しに見る風景は空地に積まれたゴミの山で、夏など窓を開けておくと風がふくたびに悪臭に悩まされた。それが現在ではすっかり区画整理され宅地造成されていること、前は建築中の家が多かったが、現在では空部屋を探すのが困難になった。いちばん身近な所では、同じアパートの住人が変っている。どちらの家族も非常に親切でよくしてもらった。現在の人はリフ山系から降りてきたベルベル人で、初めはなにかととまどったが、今では、お茶をくれ、食べるものをくれ、などと平気で言える人達だ。こうして考えてみると、やはり2年間という月日は長かったようである。

例えば子供達、当時ここに着いた時は、新しいシノア（中国人）が来たと言判になったのか、遠くにいる子供まで飛んできて、同じような顔をした子供達がシノア、シノアと自分の歩く前後をはやし立てながらつきまとったものだ。当時気になったその言葉も今では気にさわらないせいか、あまり聞かえない。そんな子供達が今では家の内まできて騒いだり、遊んだりしてゆく。初めは、呼んでも、逃げていくことが多かったのに、時間とはなんと不思議な魔術なんだろう。でも子供達は昔も今も私の国籍はシノアで名前はジャボネと思っているが、彼らの個性溢れる顔を一人一人みて将来はどんな職業に就くのかとか、このうちの一人ぐらいは日本にくる機会に恵まれるだろうか、などと勝手な想像に費やす時間も結構楽しいものだ。

この2年間、私のした仕事はとるにたらない微々たるものでも、この子供達が大きくなった時、私がここにいたということで、日本について身近に感じてくれるだけでも、2年間のボランティア活動の意味があったのではないかと自己満足している次第である。

最近では、1日が本当に短く感じるのだが、当初、ここに赴任した頃は、夏時間でもあったためか、1日が長く感じられ、時間を持てあましていたようだ。そのせいか、当時はイライラすることや腹立たしい事が多かったのを思い出す。しかし、その頃は何が言いたくても返す言葉も知らず、俯きしりし

ていたものだ。そういう時はどうしても家に帰っても気がおさまらず、すっきりしなかった。そのうちにそういう時は手近にある紙やノートに落書きをして気をまぎらわせるようになり、いつのまにかそんな事ばかりを書くノートを作り、現在3冊目になっているが、No.3のノートはあまり書いてない。というのは、たぶんケンカをしても口で用が足りてしまい、怒った事に対するの焦点がぼやけてしまうせいでもあり、本来の意けぐせでもある。

例えば、どこかに、その内容を紹介できればよいのだが、まことにくだらない事ばかりで、紹介できないのが残念だ。1冊目は女中など身近の環境についての不満が多く、後半より2冊目は書き方にも余裕があり、不満の範囲も広がっている。こうしてみると、不満に思うことも、月日の流れとともに変わってきているのがおもしろい。

II 生活環境

生活環境について触れてみると、日常生活品等は、ほとんど不自由しない。しかし、野菜地帯の真ん中にもかかわらず、野菜の種類に乏しく、とくにキャベツなど葉を食用とする野菜がないことと新鮮な魚介類がないため、約30km離れたフェズの市場まで買出しをせざるをえない。しかし、これも朝10時頃までには買物を済ませねばならないこともあり、バイクでは苦痛であった。そして、こういう買出しのできるのも任期中期頃までであり、その後は、あれが食べたいな、と思うだけで済ませることになる。

気候についてみると、内陸部の典型のような所で、夏は暑く、冬は寒いのが特徴であり、冬は、やはり暖房が必要であった。しかし、私は長野の山育ちであり、その寒さと比べると糞泥の差ではあるが、帰国が寒中であり、気が重い。

最後にちょっとだけ仕事について述べてみると、いろいろの問題点については別紙の通りだが、赴任以来現在まで大過なく過ぎたという感じである。これは前任者各位が活躍されたため、ある程度の方向づけができていたことが何よりも大きな要因と考える。それにひきかえ自分の仕事を振り返ってみると、はたしてこの2年間の滞在は現地の方々に多少なりとも利点を見いだしてもらえたかどうか心配だが……。

現在のAin Taoujdade試験場の構成は次の通りである。

直接指導機関→Grand chef 2名 (Ingénieur) 畜産部と農業部門に分かれており、養蚕は一応農業部門のchef が当たっている。

モロッコⅡ……モロッコ養蚕業の将来を考え続けた日々

現場(事務所)	Chef	1名	(アジワントクニック)
	職員	1名	(アジワントクニック)
(屋外作業)	入夫	1名	(ウブリエ・スペシャリスト・タイプ係)
	入夫	2名	(ウブリエ・カボラル1名、ウブリエ・スペシャリスト1名、彼が養蚕飼育する)
	入夫	5~15名	(常時5名 繁期15名ぐらい)
	守衛	2名	夜
		1名	昼

以上が当試験場の現在の構成要員であり、皆さんには公私にわたり一方ならぬお世話を焼き、心より感謝している。私のアラビア語が上達せず、入夫の皆さんとは分らないことはお互いにニコニコすることで話が通じてしまっただけで、ちょっと残念な気もしないでもない。

さて、任期延長後の仕事として、山本駐在員より仏文でレポートを書くように御指示を戴いたが、なかなか手が動かず、今までかかってしまった。書いてはみたものの、養蚕の現場を知らない第三者の方に少しは分るような文かどうか、あまり自身がなく、一応私の友人にみてもらったが、誤字、脱字、動詞の変化の誤りなど多く、赤面の至りだった。文章自体自分の納得いくよう簡単に書いてあるためきわめて幼稚な文だが……。

今回2年分まとめて辞書を使ったので、辞書代の元はとった!! いずれにしても、モロッコの養蚕に必要なものははっきりした養蚕開発のための担当機関。そして、現在の試験場に必要なのは、モロッコ人 ingénieur が第一の条件と思う。

以上ですが、私の最終報告書よろしく御査収、御批判下さい。なお、仏文の方ですが、モロッコ側に渡るような機会がありましたら、その反応等を伺いたいと思っております。

『言葉があって心が通じる』という私の2年間を振り返っての結論をつけ加え、終りにします。

III LE POINT DU VUE SERICICULTURE AU MAROC

日本はモロッコの多くの分野で貢献している。養蚕という特殊な部門でも、10年以上に亘り協力活動が続けられ、その結果もますますである。長年の計

面であった試験場の建てかえが行なわれたのに鑑み、モロッコでの養蚕開発の基礎はできたといえる。長年に亘りモロッコの養蚕振興計画に携わってきた最後の日本人ボランティアとして、現在、試験場が遭遇している諸問題について述べてみたい。

1. ELEVAGE (飼育)

長年に亘る技術協力の成果として、現在ではボランティアをそれほど必要としないまでの技術程度になったと思われる。しかし、必要最低限の諸条件が整ったことであり、特に資材については養蚕がモロッコにないこともあり、現在まで大部分の道具を日本から持ってきているので、モロッコ政府の養蚕試験場に対する無関心から判断すると、当面日本人ボランティアが去った後は大小資材不足に悩むと思われる。例えば現状では携行機材として持ってきたにもかかわらず、利用されないものもある。その使用されない原因はささいなことである。

(1) NOUVELLE NOURRICERIE (新稚蚕飼育場)

今まで簡易防乾飼育が行なわれていたが、それにより当然のこととして「小部屋方式」の稚蚕飼育施設が完成し、1979年春より使用されるが、見たところ各小部屋が必要以上に小さいと思われること、また換気孔が充分でないと思われること、加えてコンクリート造であるため、飼育に当たり十分な注意が必要と思われる。

(2) MANIERE DE TRAVAIL (作業方法)

日本の場合であると職員は研究テーマを決め、それに従い職員自ら仕事を進めるのが一般である。モロッコの場合だと職員といわれる人達は直接自分達の手を出すことがないばかりか、現場に顔を出すことも多くない。もちろん日本の仕事の方式を直接モロッコの組織の中に入れることはできないが、モロッコに二人しかいない技術者であるから、もう少し工夫が欲しい。

現在のところOuvrier Spécialisteと呼ばれる人が養蚕について全面的に責任を持たされているにもかかわらず、彼の養蚕に対する技術程度は極めて低い。直接彼に何かを教えるにも、彼は自分の名前さえも告げないような人なので、満足のいく意志の疎通はできなかった。したがって、いろいろ感じた事はFonctionnaireといわれる人達に言うわけであるが、そこから下にはなかなか伝わらないのが現状である。

2. MURIER (桑)

(1) IRRIGATION (灌漑)

灌水についてみれば、雨期明け直後の桑の発育は極めてよい。しかし、4月下旬から5月にかけての春の収穫時は新梢の伸びが緩慢になる。これは水不足と肥料不足が原因と考えられる。特に7月、8月の盛夏には雨もなく、灌水も満足にできないため、桑の木自体が弱る。特に、下部の落葉がはげしい。

本年1978年3月に約1.5haの桑園を造成したが、折からの水不足のため約1m前後に伸びたところで枯死してしまった。Ain-Taoujdateは穀倉地帯の真ん中にあるが、それも夏期の灌水ができるから、野菜栽培もできるのである。

今後の課題として、もっと雨量の多い地域に試験場を移転するなどの対策をとるとともに、養蚕の普及に当っては各農家が十分に灌水できるような地域を選ぶべきだ。

(2) EPANDAGE D'ENGRAIS (施肥)

通常、施肥計画は年3回であり、まず冬肥として11月~3月頃までに堆肥等、春肥として11月~3月頃までに適量の化学肥料を入れ、その後、各収穫期に追肥を施す。ここで問題になるのは、春肥についてだが、いろいろのモロッコ側の事情により毎年施肥の適期を逸してしまう。今年の場合は前々より肥料を早く、と言っていたにもかかわらず、4月下旬から5月上旬に亘ってしまった。この時期はすでに降雨もなく肥料効果も悪いと思うのだが……。そのためか春先一時的に肥切れ状態を示すような気がする。いずれにしても、よい桑園を確保するためにも今後何らかの対策が望まれるところである。

3. TAILLE (仕立て)

桑の仕立てが極めて悪い(この点は調査団の方々も指適している通りだ)。桑の仕立ては、まず果樹の樹型のようなものである。これは桑の仕立てについてのしっかりした見本がないため、どうしても果樹が剪定見本になってしまうのだろうと思う。とくに枝が太く長いため、このような桑園は春の芽吹きが斉一でないばかりか枝の頂上部より70cmぐらいの範囲にしか芽がでない。しかし、こういう桑の木ほど早魃にも強いらしいので、長所もあるが、あまりにも高いため、収穫面では非能率的な面もあり、あと一步の工夫が必要。この分野は教える方にも教わる方にとってもむずかしいと思う。

4. PLANTATION (植付け)

(1) PLANTATION

植付け時の諸注意について述べてみる。

今までどのようなわけか植付け時期が遅く、苗が完全に発芽したあと植付けたり、苗掘り取り後そのまま放置したりしており、活着率が悪かった。それと現在、試験場では桑園管理に大型トラクターを使うためといって、畦間が非常に広く、従って1ha当り植付本数も極めて少ない(日本8,000/ha, モロッコ4,000/ha)。将来普及に当たっては、反収の効果を考えるためにも、もう少し植付け本数を増すよう指導すべきであろう。

(2) PEPINIERE (苗木)

今まで、桑の繁殖についてはいろいろの方法を試してきた(例えば、接木、す伏、古条さし木、新梢さし木、マルチ利用他)が、いずれの方法も、水不足などの問題も含めて、平均的な結果しか得られなかった。たぶん水などの育苗のための管理条件を整えば、モロッコにおいては、どんな方法でも比較的簡単に桑繁殖はできると思われる。

5. DEVIDAGE (繰糸)

現在モロッコでは、年間約500kgくらいの産繭量である。(内訳: 日本より春2回、秋3回の蚕種の補助により300kg、現地蚕種製造により100~200kgの産繭)。例年、繰糸は冬期間2ヶ月ほど行われ、繰糸にはOuvrier Spécialiste1名と補助員1~2名が当たっている。年間400~500kgの産繭に対し、2ヶ月ほどの繰糸では充分ではないため、現在では繭の保管場所にも困るほどになっている。たまた自動繰糸機の話もあるが、近い将来までの産繭量から考えると、現在ある座繰繰糸機を年間使用することにより繰糸の問題は解決する。とりあえず、年間繰糸に対する人夫を若干名養成してはどうか。あわせて試験場で生産した生糸は国内販売できるような方法を考えるべきだと思われる。

6. REMARQUES GENERALES

- (1) 関係職員の間で検討会などの会議を持った方が仕事が能率的にできるような気がする。
- (2) 古参技術者は新人技術者の養成を考えるべきである。人に自分の

持っている技術を教えるのは損、という考えは納得できない。

- (3) なるべく早い機会に本場の養蚕について研修の機会に恵まれることを祈りたい。
- (4) 現状を鑑みるに養蚕研究所はその活動がスムーズにゆくように会計面での独立を考えてはどうか（モロッコの現在では無理らしいが……）。あわせてS.O.D.A.などの組織に養蚕開発の一部を分担させてはどうか。
- (5) 新しく、養蚕試験場に配属になる人も配属前の研修は畜産、農業など違った分野で研修をしているが、養蚕部分に配属になる人は、やはり養蚕部門で研修を受けた方が効果的と思われる（といっても、いろいろ問題はあがるが……）。
- (6) 一応、モロッコの養蚕開発についてというよりも、むしろ養蚕試験場については農林省試験局が担当事務所のようにあるが、現状を鑑みるに、その組織はあまり有効的に機能していないと思われる。つまり、試験場について無関心であると思われるので、10年を経た現在、養蚕開発についての指導機関を再編成してはどうかと思う。

7. LE POINT DE VUE SERICIGOLE AU MAROC

題が大きな割には、まともなのが書けなかったが……。日本、中国など現在養蚕の盛んな所では、早くから絹糸の持つ優れた特性に着目し、衣料を着るという目的のため利用してきた養蚕業が発達したと思う。アラブの国での絹糸の位置についてみると、絹に対する潜在的な需要はかなりあると思うし、トルコ、イランには約2,000tの繭の生産がある。モロッコの場合は13世紀頃かなり養蚕が盛んであり、またモロッコ国内の需要を満たしていたと聞くが、現在に至っては養蚕がないばかりか、養蚕があったために発達したと思われるようなものは、現在のところみることができない。その原因として、私としては気候のはげしい環境に羊毛がよく合ったためと考える。

一度根づきかけたモロッコの養蚕が、農民の中に深く浸透しなかった要因は多岐にわたると思うので、現在二度目の養蚕振興にあたり、その原因を調べるなど、十分な処置が必要である。

また養蚕を普及するにあたり、普及対象地区は充分にその環境等を吟味し、養蚕を受け入れる農家に対しては手厚い保護政策が必要であるし、養蚕業の有利性について（他作目に比べて）充分納得させた上で、実施に移

すことが望まれる。

ところでモロッコの農業をみると都市部に近い地帯、つまり平坦地では大型機械の導入等により農業も近代化されているが、反面地方部及び山間部ではまだまだ粗放的農業の域をでていないと思う。こういう所では馬をはじめ、ロバ、ラクダ等の必要性が大であることは言ってもいい。いずれにしてもモロッコの農業は広大で肥沃な土地のお蔭で、結構収穫率はいいようである。こういうところに養蚕作目の煩雑さが受け入れられるかどうか疑問であるし、相当の苦勞が必要と思われる。

普及対象となるのは零細な山間部の農家を考えていると聞くが、この場合、私としては、ほとんど成功の可能性がないと思っている。むしろ、こういう所には他作物で比較的有利なものを政府の保護のもとに普及した方がよいのではないか。養蚕については土地、金の使い道に困っている人、またはS.O.D.A.Coopérationなどを利用したとき、若干の可能性はあるように思えるのだが……。

現在、モロッコの養蚕業はそのよりよい方向を模索中であるが、まず最初に養蚕振興のための強力な推進機関が決定されなければ、モロッコにおける養蚕業の発展はありえない。

以上、大意を詳ねてみましたので、よろしく御指導、御批判を賜わりますようお願い申し上げます。

日本に帰って考えること

東 方 今 佐 雄

モロッコの底知れず澄みきった青い空が懐かしい。今はもう見ることができな
い、その青い空の下で汗を流す一人の老人にアラビア語で「サラマレクン（今
日は）」と声をかけられた。

その老人のそばには五つ位の男の子がいた。その子の目は恐ろしいほどに澄
みきった黒い目をしていて、見ず知らずの老人とは思えない口調で話し始めた。
かつて私は、この様に気遣い見ず知らずの人に声をかけられ話したことがなか
ったように思う。しかし、ここでは、誰彼を問わず、すぐ親しくなれる。

そしてその老人は、かつて自分は中国に兵隊として行った経験があるなどと
話して別れた。そしてその別れ際に、今まで黙っていた子供が私に向かって、
「シノア（中国人）」と叫んだ。と同時にその紫直そうな澄んだ目をした小さ
な子供に対し急に憎さを感じてしまった。

そして、何日かしたある日、私はいつもの様に市場で買物をしていると、突
然後ろから「シノア」「シノア」と呼ぶ子供の声に「このガキめ」と思いなが
ら振り返ると、先日の男の子とロバに乗った老人がニコニコと私に呼びかけて
いたのであった。

彼は、彼の奥さんが幾晩も夜なべをして編んだじゅうたんを今日のスーク
（モロッコ各地で見られる定期青空市場）で売り、買物をして帰宅するところで、
老人は私に、今晚是非家に夕食に来いと、熱心に招待してくれた。私は、あ
まり熱心に招待してくれるので、彼の家庭をのぞく興味も手伝い、喜んで行く
約束をした。

さて夕刻、満天の星を見ながら、私の家から1km程の所にある20戸ばかりの集落に着くと、そこには外燈もなく、明りといえば暗闇に薄赤く「ポー」と光る石油ランプの灯だけで、その時初めて、町のすぐそばでもまだ電燈もなく、水道もないことを知り、1kmと離れていない私の町までは「電気も水道もきているのに」と不思議に思えた。

犬に吠えられながら、彼の家に着くと、まず子供が飛び出し、続いて老人が

出てきて、「よくきた、よくきた」といって、両手を広げて、部屋に招き入れてくれた。

部屋に入ると、バッテリーを電源にして映す日本製テレビにスイッチを入れてくれたり、自分の息子達を呼んで私に紹介してくれた。家族は、彼の奥さんが二人と長男とその嫁と子供と中学の男の子という7人家族で、中流家庭らしいということがわかった。

私は、アラビア語はそれ程上手ではなかったが、中学の子供がフランス語を話してくれたのと、私の片言のアラビア語で、結構話しははずんだのだが、待っても待っても、夕食にはなりそうもない。つまり、この人は、儀礼的に私を夕食に招待してくれただけであり、それを本気にして喜んで行った私は、かえって、彼を困らせてしまったのだ。

彼は、私が着いてから、庭先のニワトリを料理してくれたのである。

料理ができて食事をしている間中、みんな私に「たくさん食べて下さい」と精一杯のもてなしをしてくれたのだが、「このニワトリは今までタマゴを生んでいたんだろうなあ」などと様々な事を考えると食欲もでなかったが、食事後、デザートに出してくれたイチジクの甘ずっぱかった事が印象に残っている。

この日以来、一番早く声をかけたのは、中学に行っている息子で、「今日、日本について勉強した」と言って、「オカイド、オンド、キュウシュ、チコク」と唱え、「自分は今中学だが、大学まで進むつもりだ。現在モロッコで人気のある職業は物理化学だからそれを専攻し、日本に留学したい」と将来の夢を熱っぽく話してくれた。小さな親日家が出来たような気がした。

そんな事があってから、老人は、たびたび私の所へ、今日はビーマンをもってきたぞとか、ナスをもってきたとかいって、野菜や果物をたくさんもってきてくれたり、お茶を飲んでいったりするようになり、また私も彼の家にとたびたび出入りすることになった。

何度目かの食時の時からは、ごく自然に、彼の奥さん達も一緒に食事するようになり、紫顔も見ることができ、冗談もいひ合い、笑うことも多くなってきた。その頃になると、老人がいてもいなくても、私はお茶を飲んだり食事をするのが自由にでき、家族の一員としてごく自然にふるまえる様になっていた。

帰国がせまり、別れを言うと、みんなが涙を流し、「アラーの神様は、お前がどこにいても、お前の事を教えてくれるよ」と言い、「お前の家族に宜しく」「お前の友人に宜しく」「ジャボネ全部に宜しく」と、初めて日本人だと認め

てくれた。現在、私がモロッコに行く機会があったら、それは、モロッコに「行く」のではなく、モロッコに「帰る」のである。



マーケットの風景



水飲場の風景

東方隊員の報告書を読んで

田澤 四郎

モロッコ国の国情や国民気質、自然立地条件等についての知識に乏しく、東方隊員の報告書を一読したのみで所懐を述べることは甚だ厚顔であるが、ご依頼により、敢えて筆をとることとしたので、お含みいただきたい。

1. 文化の蹄の音がきこえてくる

赴任当時、窓外からみえた風景は空地だったところが、現在区画整理され、宅地造成のあと新築の建物がたちならんでいるとのこと。このような都市化への息吹は、世界各地にみられる風潮かも知れない。漸次、都市から郡部へ、郡部から村落へと文化の流れは、末広がり展開されている。

宅地造成、建物新築それにとまなう付帯設備や地域諸施設の環境整備など一連の基盤がととのってくるのと近代的産業の開発、導入も容易になってくるものと期待される。

2. 試験研究について

(1) 試験研究へのとりくみ

試験研究体制は、チーフ1名、職員1名、農夫が10数名配置されているようだが、試験研究の効率の推進のためには、研究者の充実、研究部門の確立とそれにとまなう人的、施設の整備が望まれる。

養蚕も長年の協力活動により、その問題の所在や方向なども把握されているようなので、それを踏台にして、現行体制の見直しが必要となってくるのではなからうかと思う。

(2) 試験研究者の育成

優れた試験研究者を育成するため、新人技術者への研修を、長期的視点に立脚して、計画的に行うことが大切であると思う。また、応急的には、現在試験場にいる研究者（職員）に対し、資質向上のための研修の場をつくってあげることが重要ではなからうか。なお、試験場でつくりあげた成果を末端農家へ

普及・浸透させるためには、指導者や中核農家を研修する場や研修指導者についても、内外の動向をよく見究めたうえで整備の方向について検討しておく必要がでてくるだろう。せっきやく、よい「タマ」がこめられても、目標物を射ち落せないようでは、苦心も水のアワとなることが懸念される。

(3) 試験研究のすすめは相互にミーティングを

試験研究をすすめるにあたって、人間関係をよくすること、また、各人のおかれている位置づけをはっきり認識させ、それに必要な知識、技術を身につけさせ、お互いに連絡しあい、目的に向って気をあわせて走ることが大切である。

このため、定期的、かつ必要に応じ、話しあいの場をもち、忌憚のない意見を開陳し、意思の疎通をはかる必要があると思った。

3. 養蚕技術について

(1) 桑園の設定

モロッコ国（カサブランカ）における平均雨量をみると、5～9月の間は約30%であり、これは、年間雨量420%の7%にあたる極少雨期の感がある。したがって、かかる地帯での問題点を頭にいれて、土壌の保水状況、渇水の可能性、被覆物入手の難易等を考慮にいれて、桑園の選定には充分留意すべきであると思われる。

(2) 桑の仕立

桑の樹型は、果樹の剪定がモデルとなり、乱れているが、干バツに強く、収穫面では非効率な面があるとのことである。収量をあげ、作業能率をあげる桑仕立には、自然条件、土質、経営形態等を前提とした桑仕立のあり方をいかにすべきかを十分に検討することが必要であると思われる。

(3) 桑の栽植本数

桑園管理面から大型乗用トラクターが導入され、このため走行幅を広くとっているため、ha当たりの栽植本数は4,000本となっているとのことだが、現場の実態を考慮にいれた桑仕立からみた畦幅、株間の距離を考えた栽植本数をきめなければならないと思われる。

(4) 蚕種製造

蚕種を充足するには、外国からの蚕種の輸入と自国内生産とがあるが、この場合での悩みは、輸入蚕種に依存すると値段が高くなり、コストの面で割高と

なり易くなる。また、自国内生産となると技術や施設等に相当なテコ入れをしないと、農家で使える蚕種の確保は困難である。

したがって、蚕種の供給計画については、慎重な配慮が必要で、技術や施設の整備状況等をもて、自国内生産へのとりくみについて、将来的には考えておく必要があると思う。

(5) 蚕児飼育、上簇

蚕児飼育、上簇のための施設、機械器具の設置には、養蚕経営の規模、労働力、収益性等を充分吟味検討したうえで、どの部門に、どのようなものを取りつけるか、また、とり入れるかをきめなければならないと思う。

また、養蚕の施設、機械器具等の整備には多額の資金を要することになるので、一応経営のメドがつくまでは、地道にいくにこしたことはないので、現地もしくは周辺地区から調達できる資材を有効に活用する養蚕の方法を創り出すことが、重要ではないかと思われる。

4. むすび

養蚕は桑づくり、蚕種製造、蚕飼という植物、動物部門をかかえ、さらには製糸、織物という工業部門に及んでいる。つまり分野は広範であり、奥行きも深く質的なものが求められる。

養蚕に限って言うならば、この推進のためには、現場の実態をつぶさに把握し、その地帯（農家）で実現可能な技術を生み出すための、試験体制なり、指導者の育成が必要で、その道程はけわしく、関係者の深い理解と協力がなくてはなかなか推進できるものではないと思われる。（昔年海外協力隊技術専門委員＝養蚕）

農獣医科大学の公衆衛生研究室にて

総合報告書

53年12月5日記

派遣国 モロッコ 51年1次後期組

職 種 獣医師

氏 名 菊池 修一

配属先 Institut Agronomique et
Vétérinaire HASSAN-II
de RABAT

菊池隊員の略歴

氏 名：菊池修一

生年月日：昭和26年5月24日

出身県：福岡県

職 種：獣医師

派遣期間：51年10月～53年10月

I 概 略

昭和51年3月、青年海外協力隊試験に合格する。

同年4月、5月、福岡市役所食肉検査所、魚市場、青果市場で技術研究する。

同年6月から9月、JOCVでフランス語等の訓練を受ける。

同年10月、日本を出発し、パリ経由でラバトに到着する。

同年11月からラバト市内にある Institut Agronomique et Veterinaire HASSAN-II (農獣医科大学) の Département H.I.D. A.O.A. (公衆衛生研究室) に勤務する。夜間のフランス語学校へ週3回通う。

同年12月初旬、イスラム教による「羊祭」の時、はじめてモロッコ国内 (Tanger, Al-Hoceima, Taza, Fès, Beni-Mellal) を旅行する。

昭和52年1月、日本大使館主催のパーティに出席する。

同年2月、午後から2度目の出勤時間に、ミキサー車と事故を起こす。幸い軽症ですむ。

同月、ヨーロッパからの輸入牛から口蹄疫 (法定家畜伝染病) が広まる。

同年3月、JOCVに依頼していた機材 (日本製の種々の細菌用培地、コロニー計数器、ハサミ、メス、ピンセット、白衣、etc.) が到着する。

同じ頃、当研究室において、市販乳及び一般農家から採集した牛乳中の抗生物質の検出を始める。

同年6月、解剖学研究室の6年生から、卒業論文のため顕微鏡写真の撮影を依頼される。微生物学研究室にある最新式の全オートのLeitz社の顕微鏡を組み立て、フランス語の解説を苦労して読み、撮影する。

同年7月、卒業論文発表、学年末試験のため、学生、教授は多忙である。

同年8月、大学は夏休みのため、大学関係者は一斉に休暇をとる。私もフランス、スペイン、テュニジアを旅行する。テュニジアでは、久しぶりに同期の隊員と親睦を深める。

同年9月、新学期が始まる。フランスのリヨンから公衆衛生実習のため、臨時講師がくる。当公衆衛生研究室に4名の新6年生が入り、加えて、新たに1名のAdjoint Technique (技術助手) が解剖学研究室から入室し、秘書も農芸化学科から入れかわる。

同年10月、濃硫酸 (100ℓ) を購入し、クロム硫酸を作製する。また炭疽の診断用抗血清をフランスのパスツール研究室から購入し、屠場での現行の

肉眼的検査に加えて、細菌学的検査方法を併用し、診断の正確さを増す。

昭和53年1月、助教授がかねてから購入を依頼していた簡易診断用培地 (apis) がフランスより届く。これに合わせて、日本製培地もパスツール研究所の培地やDifco社の培地同様に使用される。

同年5月、6月、市販のひき肉の細菌学検査 (主にサルモネラ菌) に従事する。しかし、サルモネラ菌は分離されなかった。

同年7月、例年のように学生、教授は、卒業論文発表、学年末試験のため多忙である。今年は例年より留年生が多いようである。これは今春に行なった学生のストライキのため、再試験は行なわれなかったからである。

同年8月、大学の夏休みに、モロッコ国内 (Tanger, Tétouan, Beni-Mellal, Marrakesh, Agadir, Essaouirra, Safi) の旅行と、スペイン、フランスの小旅行をする。昨年の旅行の時と比べ、大分フランス語が通じた。

同年9月、新学期が始まる。H.I.D.A.O.A. の研究室の1名が、そのまま Docteur Vétérinaire として研究室に残る。H.I.D.A.O.A. の学生実習の手伝いをする。

同年10月、2年間勤務した Adjoint Technique の Mr. Driss が技術研究のため1年間リヨンの獣医科大学に行く。同時に Dr. Marrakich が研修のため5年間パリ大学獣医学科に行く。また、新任の獣医師隊員 (J O C V) が到着する。彼を職場 (ラバト市居場) と私の職場の獣医科大学に案内する。

II 職場の紹介

私の勤務した Institut Agronomique et Vétérinaire HASSAN-II (ハッサン二世農獣医科大学) は、モロッコの首都ラバト市郊外の静かで広々とした環境の中にある。本大学は、モロッコ唯一の獣医科大学で、本年10周年を迎える新設校であるため、外人教授の占める割合も多い。本大学でのモロッコ人教授55名に対し外人教授105名、獣医学科だけを例にとってみても、モロッコ人教授14名、外人教授18名 (この他外人による臨時講師43名) といった数字によっても明確である。しかし、年々本大学の卒業生が大学に残り、自立を目ざす傾向にある。

農獣医科大学は五つの学科 (Ingénieurs Agronomes, Docteur Vétérinaires, Ingénieurs de Technologies Alimentaires,

Ingénieurs de Travaux Ruraux, Ingénieurs de Travaux Topographiques) の他に, Techniciens Laboratoires の短期(2年間)の専門課程も含まれている。

獣医学科内には, ① Anatomie Physiologie (生理解剖学) ② Pharmacie, Biochimie Médicale et Toxicologie(薬理学, 生化学, 毒理学) ③ Microbiologie, Maladies Contagieuses (微生物学, 伝染病学) ④ Parasitologie et Zoologie Appliquée (寄生虫学, 応用動物学) ⑤ Pathologie de la Reproduction et Obstétrique (臨床繁殖病理学) ⑥ Médecine et Chirurgie (内科学, 外科学) ⑦ H. I. D. A. O. A. (Hygiène des Industries des Denrées Alimentaires d'Origine Animale (動物性食料品衛生学) ⑧ Anatomie Pathologique (解剖病理学) の八つの研究室から成っている。私は, その中の H. I. D. A. O. A. の研究室に勤務した。

当研究室には, 教授 (Belemlih Abdelhamid), 助教授 (El Marrakchi Abdelhak), そして研究員の私, 以上は Docteur Vétérinaire, この他に, Adjoint Technique (技術助手) の M. Driss M. Blahim の 2 名, 秘書の Mlle Falida, 雑務係の M. Mustapha が在室し, これに毎年 3~5 名の 6 年生が各々卒業論文のための実験に従事している。

教授の Dr. Belemlih は, 年齢 30 歳, フランスのリヨン獣医科大学を卒業後, 現在のポストに就任し, この他ラバト市屠場の場長も兼任している。同居場では 10 年ほど前から J O C V 隊員 (獣医師) が活躍していて, 彼の日本人との接触は長い。彼は午前中屠場, 午後は大学で講義といったように多忙である。しかし, 屠場における実際の屠体検査は, 日本人獣医師とブルガリア人の獣医師 (10 数年勤務している) が行なっている。

この他彼はモロッコでのペット (犬) の獣医師会長としても活躍している。なお彼はフランス人と結婚し, 2 児のパパでもある。

助教授の Dr. Marrakchi は, やはり 30 歳と若く, パリ大学獣医学科を卒業後, パリで数年間勤務の後, 当研究室に勤務している。しかし, 当研究室の実際の指導, 運営は, 彼なくしては動かない。具体的には, 授業, 6 年生の実験の指導, 4, 5 年生の公衆衛生実験と Techniciens laboratoires の専門課程の学生の指導も行なっている。ついでに彼の趣味は魚釣りであり, 毎週日曜日には郊外まで出かけている。

次に Adjoint Technique の M. Driss は、私の就任する 2 ヶ月前に短期の専門課程を卒業後、当研究室に勤務している。年齢 23 歳、彼の仕事は、Dr. Marrakchi の行なう学生実習、実験の準備とその後片付けが主で、最近では学生実習の手伝いもできるようになった。学生実習（4 年生、5 年生）には、細菌学的実験と化学及び生化学的実験に大別されるが、彼は前者の方に従事している。

私が赴任した当初は、グラム染色、ギムザ染色も知らなかった彼が、Dr. Marrakchi と私との指導により、一応の仕事ができるようになった。しかし、今でも実際に行なう実験の手段、方法はマスターしても、生じた実験結果の判断、分析といった総合的知識までは持っていないのである。この事は彼の地位、身分からすれば当然のことであり、Dr. が行なう実験、講義の準備が Adjoint Technique としての任務であり、仕事であるからである。ところが、この度、私の任期切れと同じ頃に、フランスのリヨンの獣医科学の H. I. D. A. O. A. 研究室へ 1 年間の stage（技術研修）のため出発した。1 年後の彼の成長を期待するものである。

もう一人の Adjoint Technique の M. Blahim は、M. Driss より 3 年先輩になり、同大学勤務歴 5 年、26 歳の独身である。彼は昨年 9 月の新学期に、Anatomie Pathologie 研究室から移って来た人で、主な仕事としては Dr. Marrakchi の行なう学生実習の化学、生化学部門の助手をしている。しかし、この度のバカロレア試験に合格し、長年の念願だった Faculté Science（科学部）で勉学に励む予定である。4 年後に彼が Ingénieur となることを心から祈る。ところで M. Driss と M. Blahim 両氏には、私のフランス語の師として常日頃お世話になったことも、今では懐かしく思い出される。

次に、秘書の Falida 嬢は、最近婚約したばかりの 20 歳のマドモアゼルである。仕事は、教授、助教授の授業用文面、ノートあるいは 6 年生の卒業論文のタイプが主である。彼女は、夕方には速記の学校にも通っている。

最後に雑務係の M. Mustapha は、22 歳と若い勤務歴は 5 年間と長い。仕事は、助教授の実験後の後片付け、器具の洗浄、部屋の掃除等、地味な活動を行なっている。彼は性格的に朗らかで、クラブ活動（サッカー）にも参加している。

最後に私の仕事について述べると、教授 Dr. Belemli h が寮場の場長を兼任している関係から、H. I. D. A. O. A. 研究室における仕事と居場に関

する仕事とに分けることができる。

まず当研究室では、学生実習の指導並びに Adjoint Technique への技術の伝達及び助教授 Dr.Marrakchi の手伝いがある。しかし、学生実習の指導、特に6年生の卒業論文のための実験に対する指導は、非常に語学力（フランス語）を要するため、私の不十分な語学力では語学でやり込められてしまうことが幾度かあった。彼らは確かに勉強しているが、彼らの卒業論文のテーマや実験を日本のレベルと比較すると、かなり低いことは明らかである。にも拘らず指導できないことは、彼らが超エリートであり、高いプライドを有していることだけに起因するものではなくて、やはり私の語学力の不足によるものだと痛感した。それだけ語学の勉強に打ち込んできた。このため学生への指導に対しては、満足な成果は得られなかったのが実情である。

次に Adjoint Technique の M.Driss への指導であるが、私が赴任当初は顕微鏡学的検査の初歩であるグラム染色やギムザ染色でさえ知らなかった彼が、フランスのリオン獣医科大学の技術研修生として選出されるまでになったことは、Dr. Marrakchi と私の指導によるものと満足している。また Dr. Marrakchi から依頼された仕事の中には、市販乳あるいは検体から採取した乳中の細菌学的検査及び抗生物質の検出の他、種々の細菌株（*Bacillus stercophilus*, *Salmonella* 菌, *Proteus* 菌）の継代があった。

この他、私が当研究室を改善したことを記すると、細菌学的実験にとって非常に重要な、その準備段階の徹底を計った。まず従来の液体洗剤（市販の）だけによるガラス器具等の洗浄をクロム硫酸を作って、その改善とその後の水洗の必要性を説明した。これにより、ガラス器具類の洗浄、水洗、乾燥、滅菌といった一連の過程を確立した。

次に、自動化学天秤の使用法を指導した。従来、ざら紙とスプーンを使って試薬、培地を測定していたのを、日本から薬包紙と薬匙をとりよせ測定法を確立した。それから、培地の作成方法、培地への接種方法及び顕微鏡学的検査（種々の染色液の作製、使用方法、判定）の指導を行なった。つまり従来のメチレンブルー染色一点張りを多種多様な染色法による検査に改善した。

一方、屠場に関する仕事としては、Dr. Belemlih が屠場の場長を兼任しているため、屠場で細菌学的検査を要する疾病、例えば炭疽、結核、サルモネラ感染症、に対しての同定を行なった。というのも、屠場では細菌学

的検査を行なう器具、機械、試薬、試剤が不足しているからである。今回（1978年10月）赴任した獣医師（ラバト屠場勤務）にも、この事は充分説明の上、もしも細菌学的検査が必要な時には、私の勤務した研究室で実験、検査が行なえるよう Dr. Belemlih の許可をとってきたので、これからの彼の協力活動に期待するものである。

Ⅲ 問題点・希望

語学力（フランス語）の不足の一点につきると思われる。特に私の職場のように、直接学生、助手、教授達と話し合い、自分の知識を充分に伝えるには、母国語程度の語学力が必要だと痛感した。この事は、協力活動が2年間というのにも問題があるように思える。つまり赴任当初は、私の場合、特にそうであったのだと思うが、相手の意志が私には通じず、ただ手間どっていたのであるが、帰国を前にする頃になって相手の意志が大分通じるようになって喜んだ時には、すでに任期も終了になってしまったというのが実情である。

Dr. Belemlih と Dr. Marrakchi 両氏と話し合った時にも、この事が話題になり、最低5年間勤務するよう要望されたのである。しかし私の場合、大学院を終了後、実務の経験もなく協力隊に参加したので、彼らの要望も実によくわかるのだが、帰国後の日本での就職が心配になり、帰国したのである。と誓いたからといって、海外での協力活動を断念したのではなく、一旦日本で就職し、技術も学んだ後、休職とか、あるいは出向という形で、これからも発展途上国に対して技術協力を行なっていきたいと願望している次第である。

今、2年間で振り返ってみて、私の行なった技術協力がどれだけの人達に役立ったか自信はないけれど、これとは反対に、私自身のためには語学、人生観、社会観、人間関係等、日本の社会では会得できない、すばらしい経験ができたことに非常に満足するし、感謝したい心境である。

大学自体、特に H. I. D. A. O. A. 研究室では、教授、助教授をはじめ助手、秘書、学生等、すべて若いモロッコ人で構成されていて、私としても日本の大学の延長といった感じもしないではなかった。ただ皆がある程度エリートであるため語学では最初の頃随分泣かされたが、今でも、とても懐かしい2年間であったと思わせるように過ごせたことは幸福だと思う。また、私の筋で暖かく見守って頂いた山本駐在員、辻岡調整員には、深く感謝致します。

菊池隊員の報告書を読んで

松山 茂

協力隊の多くの隊員は苛酷な自然条件と異質文化の中で多かれ少なかれ苦悩するものである。自然条件への適応は、そこが人の住む所であれば何とかなるものであるし、第一それを承知で覚悟は十分に出来ているはずである。しかし異質文化の中への溶け込みはそう簡単ではない。宗教の相違、価値観の相違、時には倫理観にさえ違いを見出して悩む場合がある。ところが菊池隊員の場合、勤務先が大学の研究室という、開発途上国ではあるがかなり特殊な社会であったことは幸運というべきだろう。なんとなれば周囲はインテリあるいはエリート集団であり、ある程度のエチケットを心得ている人達だからである。本人も述べているように「日本の大学の延長といった感じ」で協力活動出来た隊員は数少ないであろう。しかも主任教授は30歳という若さである。世代の隔絶を感じるはずもなく、仕事はやり易かったはずである。問題は言葉であったろう。当初「相手の意志が私には通じず、ただとまどっていた」事実は十分に理解も同情もできるし、そのため「最初は大分泣かされた」ことも想像に難くない。しかし後には最低5年間の勤務を要請される程の無くてはならぬ人物になった事は喜ばしいことである。

日本の大学の先生の中には、特に古い先生に多いのであるが、“学問の中味さえしっかりしていれば世界のどこへ行っても通用する。語学なんて……”といった語学力に対して多少なりとも輕蔑感（やっかみにも通ずる）をこめた発言をされる方がいらっしゃる。言葉は通じなくても心は通じるということは一面の真理には違いないが、言葉が通じなければ心も通じないことがあることも真理である。特に菊池隊員のように、かなり高度の知識を相手国のエリートまたはエリートたんとする人達に伝授しようとするならば、これはもう言語は絶対的な武器であろう。「彼らの卒業論文のテーマや実験」の程度が「かなり低いことは明らか」であっても「自分の知識を十分に伝える」ことや「指導」が出来なければ、教わる側からすれば知識や能力が無いに等しいのである。

かなりきつい表現を使ったかも知れないが、協力隊も語学教育に力を入れて

いるようであるし、今後の隊員諸氏に、言葉だけはしっかり訓練していただきたい
と思うからである。

さて当初は随分と「泣かされた」語学力で「学生への指導に対しては、満足
な成果は得られなかった」実情ではあったが、教室の助手が外国留学生として
選出されるまでになったのは助教授と「私の指導によるものと満足」できるま
でになった事実を高く評価したい。「5年間勤務するよう要望された」ことか
らも、菊池隊員の協力活動ぶりがうかがえるのである。

ところで菊池隊員が研究室を「改善した」いくつかの項目の中で、「従来の
液体洗剤だけによるガラス器具等の洗浄を、クロム硫酸を作ってその改善とそ
後の水洗の必要性を説明した」ことがあげられているが、これは少々問題で
ある。御承知のように現在の日本では重金属の廃棄には厳しい規制があり、処
理施設のない所ではクロム硫酸は使用できない。菊池隊員が日本を出発する以
前に、もう一般には使えない状態にあったはずであるから、それを知らなかつ
たとはいえないであろう。いくら開発途上国とはいえ、環境汚染防止にはもう少
しシビアであって欲しかった気がする。

おわりに、「海外での協力活動を断念したのではなく」「これからも発展途
上国に対して技術協力を行って行きたいと願望」しておられるのであるなら、
もう「泣かされる」ことも無いであろうし、知己も少なくないことであろうゆ
え、しかるべき所で学位を取られ、今度は教授なり講師なりの地位で発展途上
国に貢献されることを期待したい。隊員の中から現地のクランク博士が出てく
れば、青年海外協力隊としても欣快とするところであろう。(青年海外協力隊
技術専門委員=獣医師)

イスラム社会で得た貴重な体験

総合報告書(52年2月~54年2月)

54年2月15日記

派遣国 モロッコ 51年2次前期組

職 種 農業土木

氏 名 井上 尚三

配属先 Service de l'Equipement
Direction Provinciale
de l'Agriculture d'AL-
HOCEIMA

井上隊員の略歴

氏 名：井上尚三

生年月日：昭和28年9月3日

出身県：福岡県

職 種：農業土木

派遣期間：52年2月~54年2月

日本国民として、10数年前までは、我が國の發展を國民的規模において考えていくという傾向があった。それから一世代すぎた現在、もはやその考えは、世界的規模に拡大されてきたのである。このような時代のすう勢にのっとり、私自身が日本國外で、しかも、その日本とは様相を異にする國、ここモロッコで2年間生活できたことは得がたい機会であった。

I 事務所内での2年間

さて、これから着任以後の私の活動をつづってみる。

当初ラバトの駐在員からも聞かされていたが、ここアル・ホセーマの事務所が、現在最も力を注いでいる、アル・ホセーマ平野(Plaine d'AL-HOCEIMA)の総合開発への介入が、私の任務とするところであった。このことに入る前に、まず事務所の陣容及びこの計画の概略等を知る必要があったが、幸いなことに、私の属するこの事務所に測量隊員として入っておられた梅原充さん(50年2次前期組)がおられ、彼の助言により、そのことも明らかになってきた。

この開発現場を見てみたが、すでに開発の頂点にたつダム工事も徐々に開始されていた。そこで私はもっとその計画の詳細を知りたいと思い、事務所にあるそれに関する資料を開き始めたが、そこに大きな困難があった。それは、フランス語と高度な専門知識の欠如であった。外国人技術者集団によりつくられた資料を前にして、辞書を片手に読み進めていくことが、いかに困難なことかを知ったのである。

そうこうしているうちに、Chefの方から山間部における小さな水路設計をやってくれと、仕事が与えられた。上記のような大型プロジェクトに比べて、このような小さなプロジェクトの方が自分自身で遂行できると確信もてたし、直接山間部の農民たちの生活向上に結びつくのではないかと考えた。実際、設計を進めていく上で、私が能動的に働いているため、フランス語の方も自分なりにカバーできた。ところが、こうした小さなプロジェクトが、私にその後も数多く回ってくると思っていたが、そうではなかった。この事務所のプロジェクトに関する予算が、アル・ホセーマ平野の開発にその大半が当てられていたため、私とその次の小プロジェクトを手にするまで、ラマダン期間を含んで、約10ヶ月間ほども仕事なしの状態が続いた。

この間、フランス語の向上に全力を投入しながら、少しでもこの総合開発に近づこうと努力したが、この事務所に求めている者は、もちろん技術的

に優秀な人であるが、それ以上に行政者として業者と本省ラバトを仲介しうる人間であることがわかった。これにかかわるには、やはり相当程度の高いフランス語が要求されることがわかる。この点に関して、私の着任から6ヶ月後に大学を卒業したばかりのモロッコ人技師が、この事務所に赴任してきた。実際的な技術に欠けるが、業者と本省ラバトの仲介者として、彼の達者なフランス語と大学で受けたその知識でもって、任務を遂行するに至っている。自分がこのプロジェクトに介入できなかったということに無念がるよりも、現地人技師としての任務をこなす程度の教育を受けたモロッコ人が現われてきたということに喜ぶべきかも知れない。

もう一方の私にとって十分対処しうる小プロジェクトの設計業務であるが、これが実際に数少なかったということにより、私は着任後1年目を過ぎた段階で、配置転換を考えたのである。ちょうどその時、日本へ技術研修に向うモロッコ人測量技師に日本語を教える必要性がでてき、このことで、結果的に私は配置転換をする機会を逸したのである。実際に彼が日本へ研修に出発したのは、去年の6月の終りであり、その時点で私に残る任期は7ヶ月であった。

配置転換をするには7ヶ月では余りに短かすぎるし、やはり任期延長1年ということをかからせて、このことを考えねばならなかった。ここで任期延長の問題とぶつかった。もちろん、よりアクティブに行動することによって、この国の国民をより深く知るという考えに基づくものであったが、一方で、もう1年きびしい日本の社会から遠ざかってほしいという気持もなかったわけでない。自分が後者のような気持を持っている限り、はっきりとここで2年間というものを認識し、区切りをつけた方がいいと思うようになったのである。

さて長いブランクの後に、前回と同様の小水路設計の仕事が回ってきたが、この仕事が終ると、また元のような状態に戻り、任期を終了するに至ったのである。自分の手にした設計は数少なかったが、このアル・ホセマの事務所に2年間身を置いた者として感じたことなどをこれから記してみたい。

1. 技術者たちについて

まず気づくことは、技術者の年齢層が非常に若いということである。この事務所を例にあげると、Chefを除くと、私も含めて9人いる技術者のうち、30歳を越える者は一人しかいない。技術とは盗み取るものだと

いう認識にたてば、その対象となる熟練者たちが不足しているのである。フランス支配から20数年しかたっていないこの国の現状を考えれば、当然のことかも知れない。

こうした中でも、ここ2、3年の間に Ingénieurs Marocains の存在が目立つようになった。在学期間中にエリート教育を受けた彼らは、自分の存在を将来の幹部として自覚している。そこで彼らの職場での交流は、Ingénieurs 仲間に限られているのである。この点を彼らに指摘すると、次のような答えがかえってきた。現在、自分たちより下の階級にある人々と交わると、将来自分たちが Chef になった時に威厳を保てない、というのである。職場での調和をまず考え、管理職者と、そうでない者とが家族的雰囲気の中で仕事が進められる日本の社会に比べて、彼らの職場環境ははっきりと職能階級制と認めないわけにはいかない。逆に、大卒技術者の下に位置する技術者たちは、職場での比較的長い経験にもかかわらず、将来に対する自分たちの限界を悟っているようである。努力すれば道は開けるといふ日本流の考えの通用しない環境に彼らはいるのである。

2. 業務機材について

この事務所が最も必要としており、かつ不足しているものは、業務にかかわる備品である。昨年、この事務所の拡張工事が完成した際に、豪華な製図台3台、ゼロックス1台などが備えられた。しかし実際には、これらの機材は使われておらず、宝のもちぐされである。一方で、消しゴムがない、定規がない、と騒いでいるのである。そんななかで私たち協力隊が持ち込む機材を、彼らは非常にあてにしている。エンピツがないから貸してくれ、計算機がないから貸してくれと、幾度も私に言いよってくる。それらを貸した後、彼らはなかなか返しにこない。ひどい時には壊れた状態で放置している時がある。こうして持ち込んだ機材の管理には、非常に悩まされたものである。

このような矛盾した現象について、Chef と話したところ、備品が不足しているのは知っているが、それを細かく予算請求しても認められない、と言っているのである。この点、上層部にいる管理者たちが、第一線にいる技師たちが何を最も必要としているのかを十分に把握して、それを供給していこうという前向きな姿勢を持つよう希望するのである。

Ⅱ 私の見たモロッコ人の日常社会

“アラー・アクバル”（神は偉大である）という文句に象徴されるイスラム教が、富む者、貧しき者を問わず全てのモロッコ人に、精神的よりどころを与えているように思える。また、この宗教は、その信者に精神的にも肉体的にも清くあることを強く要求している。毎日、5回のお祈りを欠かさない私の親しくしている友人は、ある時自分のパンツが汚れているから祈りができないと、わざわざ彼の家までそれを着替えに行き祈りを実行した。トイレに紙が置いてないと、当初は奇異に感じた私も、今では、水ですべてを洗い流した方が、はるかに清潔であると思うようになった。生誕後1～2年してこの国のすべての男性が行なう la circoncision（割礼）の儀式も、清潔さを求めるが故になされることなのである。ラマダン期間中の断食も、短期間であるが、すべての欲望からのがれて精神の浄化を計ろうとしてなされているように思えるのである。

豪華であるよりも、まず清くあれ、と教えるすばらしい宗教をもつモロッコ人である。こうしたモロッコ人の間にも、今なお根強く残っているのが部族主義である。この町、アル・ホセマを含む Rif 山脈から地中海沿岸にかけての地方の住民たちをリフ族と呼んで、一般の人々は区別している。彼らリフ系住民はアラビア語とはまったく違った言語、シェラハと呼ばれる言語を日常使っている。もちろん彼らは、アラビア語を解するのだが、よその町から来た人々には彼らの言葉が理解できないのである。そのよそ者たちは、ここのリフ系住民のことを閉鎖的で排他的であると非難し、逆にここの住民たちは、よその地方から来た住民たちを例外なく区別するのである。つい先日、私がこの町を去るにあたって、私たちの事務所で働く技師が自分の借りていた家に移りたいと家主に申し出たところ、リフ系住民である家主は、その技師がよその町から来たと聞くなり、その交渉に応じなくなったのである。外国人である私とその家を借りる際は二つ返事で引き受けたのだが……。単一言語、単一民族として育った私の理解を越えるものである。

次に、モロッコ人の日常生活をみてみると、農村部と都市では、はっきりと生活環境の差が目につく。この生活程度の格差こそ、発展途上国に共通した問題であるのだろうが、農村部、特にここ Rif 山岳地帯は、自給すべき小畝作付を主にした粗放農業が営まれていること、山岳地形地帯であるために、住居が散村形態をとっている。こういった住居の大部分には、まだ電気、水道の設備がいき渡っておらず、生活の基本となる水を求めて、水たま

りや井戸まで、水汲み作業に追われている女性たちの姿をよく見かける。また、男性たちは老若を問わず、くわ等の簡単な農機具を用い農作業に精を出しているのである。こうした伝統的農業に基づく生活にも変化が出てきているように思える。それは新聞などで毎日のように問題とされている農民の土地離れ (exode rural) である。今まで週1回開かれるスークを通して、産物を流通させて日用必需品を買ったりして、生活の均衡が保たれていたのに、砂糖などの必需品が値上がりし生活に不均衡が生じるという経済的理由と、一方でラジオなどの普及による情報網の発達のため、都市生活へのあこがれが助長されるといった理由などにより、exode ruralが促進されているように思える。

こうした人々の受け皿となる都市では、前記のような農村とは比較にならないほど整備されているのだが、彼ら農村地帯より流れてくる人々に対して供給すべき職が非常に不足しており、また、あったとしても低賃金労働などのように、十分に彼らの欲求を満足させるものではない。その結果、納得のいく所得も得られず、彼らはBidonvilleと呼ばれるスラム街を形成して生活するようになる。このことが、今のモロッコでの農村、都市、両面に通じる重大な社会問題となっているのである。モロッコの国内政治問題であると、このことを片づけてしまうのは容易であるが……。

しかし、こういった国の経済的貧困からくる不均衡は、他にもいたるところで目にする。我が愛すべきモロッコ人のなかで2年間生活した私にとって、上記のような一例にすぎない泥沼的現象が、いつになったら解決の方向にむくのだろうか、気をもんだりもするのである。

Ⅲ 六つの目標

最後に、赴任当初から目標にしていた六つのテーマ(これらは、ネパールで活躍しておられる岩村医師の言葉であると聞いているが)について、自己判断してみる。

- ① Go to the people.
- ② Live among them.
- ③ Love them.
- ④ Learn from them.
- ⑤ Start with what they know.
- ⑥ Build on what they have.

①について

事務所内外を問わず、旅行をしたり、またアル・ホセマの町で café を飲む時など、あらゆる機会を含めて、モロッコ人集団の中での一員となるように努めてきたし、一応この点は満足できる。ただ、学校で教育を受けた比較的若い層の人たちとは、フランス語により直接話し得たのだが、アラビア語しか知らない人々とのコミュニケーションが間接的になったりしたということにより、フランス語とは別にアラビア語の習得に関して、今一歩努力が足りなかったと反省するのである。

②について

生活という観点から2年間をみても、時に日本語を話してみたいなあ、と思うようなことがあった。彼らとともに仕事を進め、その上の問題を考え、家族に招かれると、彼らとともにモロッコ料理に舌つづみをうち、彼らの中で生活してきたが、イスラム教という宗教の世界により一層深く入り得なかったことは残念である（モスク内の立入り禁止、ラマダンの実行など）。

③について

「シノア（中国人）、シノア」という呼びかけに涙面したり、時間的観念の違いに顔をしかめたりしたが、私自身が困っている時など非常に親切にしてくれたし、とてもすばらしい宗教をもつ彼らを楽しみたい気持ちである。

④について

彼らから学ぶというより、自分にないものを彼らの中に発見するという方が正しいかも知れない。彼らは時の流れに対して実にゆりゆりとしているように思える。明日がだめなら明後日、そしてだめなら……と、極言すれば時の永遠性を信じてやまないようである。時間を区切って物事を考えることに慣れてしまった私にとって、このことはショックでもあったし、また、この考え方の違いにより、彼らとの間に衝突もあった。ある時間に来てくれと約束して、それが守られなかった場合、なぜ約束の時間にこなかった、と憤慨している自分に対して、いとも簡単に彼らは、“アラーがそれを望まなかった”と片づけてしまう。逆にいうと、彼らは人生という時の流れの延長線の行きつく先をアラーの神に託しているのかも知れないのである。

⑤について

彼らの知っている事から始めよと言われても、この事を知ること2年間かかったと言っても過言ではないような気がする。否、私自身このことをまだ十分につかんでいないのかも知れない。仕事上の問題に関しても彼らの学んだ技術上の知識は完全に Made in France である。この事にも慣れ、言葉もある程度こなせるようになり、これからスタートするぞと思った時には、任期の2年間が過ぎ去ろうとしていたのである。

⑥について

このことが協力隊員に求められる最も困難なテーマであるのかも知れない。彼らのもっているものを無視し、または、破壊の上に、物事を独自の方法で押し進めるのは、より簡単な気がする。逆に、昔から彼らが持っているものは何かをつかみ、その上に彼らが新しく望んでいるものは何かを把握して、その欲求にのっとり物事を建設していくことの方がはるかに難しいような気がする。

例えば、山奥の農村部の耕作地に存在する小さな水路をコンクリート水路にかえるに当たっても、今までその土水路の浸透水、すなわち地下水分により表面土は乾燥している耕作地にも水分の供給がおこなわれていたものを、コンクリート水路にすることにより、水分供給がストップする恐れもあるのである。自然系としてバランスのとれていたものを、人工的手段により効率を求めるために、また新たな問題も生じてくるのである。結局のところ、彼らに何を残し、何を建設してきたのかを自問するが、自分自身、満足な解答が得られないのである。

最後に、アッという間に過ぎ去った2年間に私の知り合ったすべての人々及び愛すべきモロッコ国民の一人一人に行く末、アラ-の神のもとに、幸福がおとずれることを期待してやまない。

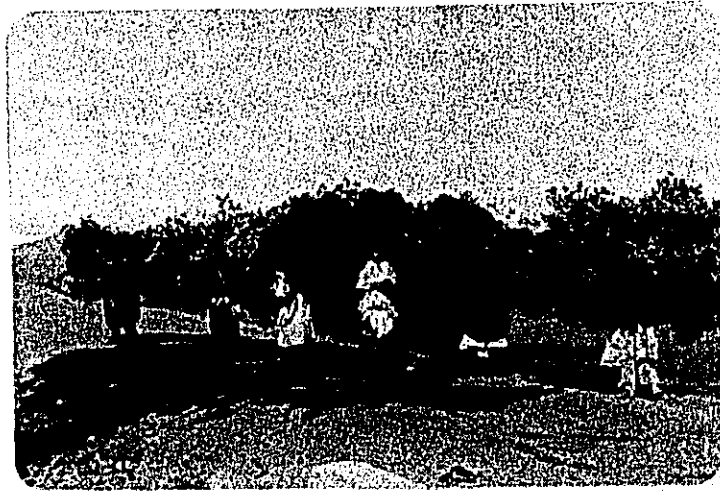
“Au revoir le Maroc et les Marocains”

日本に帰って考えること

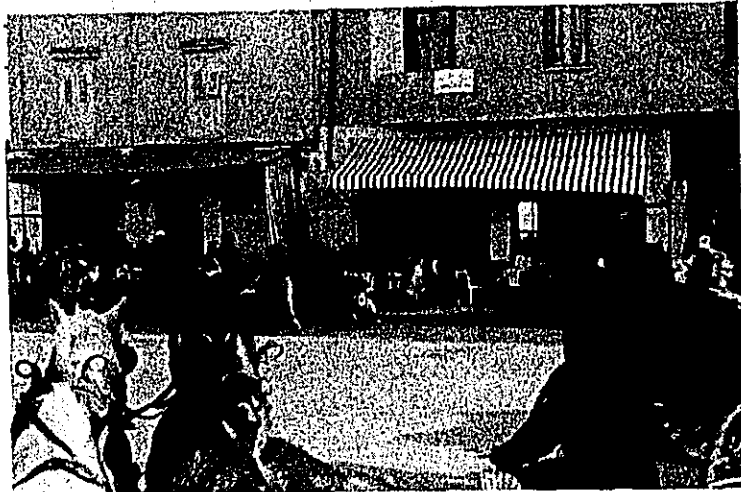
井上尚三

帰国して1年近くが経過した。現在、ある小さな設計会社で土木設計業務についている。この会社で、協力隊での体験を生かすには、余りに実務に追いつけられすぎている。日本での企業活動、それも中小企業の異常に過熱したモードに、舌を巻かすにはいられないのが現状である。ただ、休日の昼下がり、ゆったりとした気分していると、ふとモロッコで知りあった多くの人々の笑顔やふくれっつらが、目に浮かんでくる時がある。宗教などに対面して、日本人であるという枠をどうしても越えられないことがあったが、モロッコの住民というより、モロッコ住民になったと暗示にかかったようにして、彼らと喜怒哀楽をともにした2年間の、頭をかすめるのである。

このモロッコでの2年間の、私のこれからの人生の原体験になっていくような気がするし、またそうするように努力してゆきたいと思っている。レポートに書いたように、満足な仕事も出来なかったが、フランス語だけは、いくたびかの壁にぶつかりながらも努力してきた。今日、日本もようやく西アフリカのフランス圏に対して、徐々にではあるが認識をたかめているように思う。この西アフリカでの活躍の機会があればと、密かに思っているが、そのためにも、今は私の持てる技術のレベルアップに最善を尽くすつもりでいる。



10歳前後の少女たちであろうか、山のようにせおった枝木運び、そして水くみと、小学校に行くかわりに彼女らの日課になっている。



モロッコ国内どこにもありそうな喫茶店風景である。女性が一人もいないがモロッコ人の男たちの重要な社交の場である。

井上隊員の報告書を読んで

江 崎 要

私はモロッコに行ったことがないし、またモロッコについての知識も持ち合せていない。従って井上隊員レポートのコメントが十分に出来るとは思いませんが、彼の従事した仕事の内容と悩みについて、同じ農業土木の技術者としての私の体験（熱帯農業研究センター、3ヶ月間以内の短期派遣、計3回）からも共通のものを感じとることができるので、そのような観点からコメントをすることにします。

俗に海外技術協力の場合、語学半分、技術半分とよくいわれる。配属先の主な仕事がアル・ホセマの開発、しかもダム建設が主力と比較的範囲が狭い上、常用語がフランス語となると、井上隊員も非常に苦勞されたことと想像されます。常用語が英語の場合、辞書片手に、たとえ言葉はうまく話せなくとも、メモ用紙上のスケッチとワンワードの専門用語で十分に相手に通ずる（相手も技術者なのだから）面があるが、大学の第2語学ということになると、計画書の読破からダム技術に関する議論までの高レベルの語学力は、明らかに努力の範ちゅうを越えるということができると思います。このような事情から井上隊員が涙を飲まざるを得なかった無念さの心情もよくわかるような気がします。

ただ、大学卒業したてのフランス語が堪能な技師と張り合う気持がレポートの文面から感じとられることについては、多少どうかなという印象をうけました。我々日本人が行う技術協力（協力隊は多少性格が異なるかも知れませんが）は、相手国の自立を助け、また育てるものであって、そのような技師の出現は、井上隊員も多少感じておられるように、むしろ喜ぶべき状態と思います。さらに井上隊員に語学力があって、その技師に技術上のコメント、援助ができればなお理想的だったといえるのでしょう。

話は別になりますが、私が短期派遣でマレーシア、ムダ地区に滞在、研究を行ったとき、そこに、ボランティアとして2～3ヶ月前に着任していた大里隊員（農業土木）が、組織上大里隊員に仕事の指示をするマレーシア側の若いエンジニア（大学卒業後約3年、日本の大きな農業水利事業所の設計係長というよう

な立場の人)が「どうも自分と張り合う気分があるようだ」とこぼしていたことを思い出します。

これは、全般に発展途上国の人々は、日本の自動車・電気製品・カメラ・時計等、その技術の急速な進歩・発展ぶりを驚異の眼で見ているが、その反動的なもの見方として、同年代の同じレベルにある技術者としての協力隊員について、その係長は、自分と実力的に同等あるいは以下の水準にあることを確認すると、非常に安心もするし、自分自身も得意になれるという面があるらしい、ということである。井上隊員の場合のモロッコ人技師がこの話にふさわしいか否か判りませんが、そのような側面も否定しがたい現実であることをよくわきまえた上で、自分の立場と仕事を考えることが大切だと考えます。

さて、山間部の小さな水路設計が与えられ、その処理後約10ヶ月間も仕事なしの状態が続いたとのこと — これは、協力隊員の場合、何かをせずにはいられない日本人気質とも合わせて、それを如何にうまく処理するかは大変重要な問題だと感じます。

井上隊員の場合、フランス語の勉強と日本語教育に費したとのこと、それも一つの方法とは思いますが、もう少し積極的なやり方で、モロッコのためにもなり、しかも自分自身にも納得できるような過ごし方がなかったものでしょうか？

例えば、農業土木の分野で単位用水量の問題は非常に重要な問題の一つですが、少くとも私の見聞した範囲の経験では、ダム設計は欧米(日本も含めて)の超一流のコンサルタントによって難なく出来上ります(もちろん国際技術援助によって)が、肝心の水田単位用水量等、フィールドの段階の問題になると、その決定根拠は非常に曖昧な場合が多く、しかも具体的な実測データは殆どないというのが実情のように思われます。

従って、隊員の行動できる範囲内の水田地帯において水田消費水量の実測を試みるとか、これがもしも、アル・ホセマ平野でダムの受益地内にあれば、大変貴重な実測値になる(ダム容量の検証等重要資料になる)ことは間違いありません。

また井上隊員の手がけた山間地の水路作りをさらに発展させ、完成後の用水量調査を実施して、同種の事業に対してはモロッコ全体にオンライン化できるような設計指針を提案するとか、流量計等の観測機器不足というハンデはもちろんありますが、何か積極的に建設的な方向へのアタックがあと一つ欲しかったように感じます。

ただし前述の、例えば以下の話が自分独自で着想でき、しかも自発的に実行に移せたとしたら、協力隊員の領域を越え、多分専門家として派遣されても十分な実力を備えた技術者といえるかも知れません。

レポート後半に述べられている「六つの目標」、これは大変重要な自己検証のチェックポイントということができ、今後派遣される隊員はもちろんのこと、私自身にも大変よい参考となりました。（青年海外協力隊技術専門委員＝農業土木）

オアシス農業地での “Une petite proposition”

第4号報告書(53年5月～54年1月)

54年2月7日記

派遣国 モロッコ 51年2次後期組

職種 測量

氏名 渋谷 宗利

配属先 Service de l'Equiment
Direction Provinciale
de l'Agriculture
d'AGADIR, TIZNIT,
TANTAN-TARFAYA

渋谷隊員の略歴

氏名：渋谷宗利

生年月日：昭和23年9月8日

出身県：東京都

職種：測量

派遣期間：52年4月～54年4月

ANTI-ATLAS に散在する村々の中で、特にオアシス農業地での業務を通じ感じた事と一つの出張に関して書いた“Une petite proposition”について述べる事としたい。

I オアシス農業地にて

観光開発が盛んなアガディールより東南の方向、道路距離にして約 200 Km、定期バスの通る ISSAFEN より 7~8 Km 山路を行った所に人口 60 人ぐらゐの集落 IDA - OUDRIFE がある。

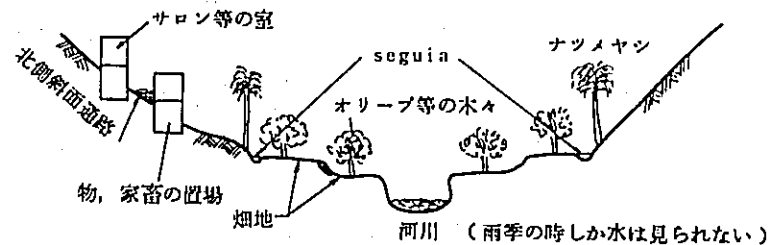
谷間に開発した幅の狭い河岸段丘を主な耕作地とし、麦、野菜、アーモンド、オリーブ、アンズを主要作物としての農業が営まれていて、これに山羊、牛、ニワトリという家畜類を加えての生活である。また生活する上で見逃がせない収入として出稼ぎがある。

この集落で見かけた成人は極く僅かであり、各家庭 2 人や 3 人は口減らしを含めた出稼ぎに出ているようで、国内では、マラケシュ、カサブランカ等北部の大都市へ、国外ではフランスを中心としてヨーロッパへ出ている。面積的に限られている農地、自然条件の悪さ、大家族と、どれ一つとってもその理由として成立し、出稼者がいないのが不思議なのである。フランスにおいて、この出稼ぎモロッコ人の数は 20 万人とも 30 万人ともいわれる多さで、モロッコ大手バス C. T. M. が彼等出稼労働者用としてアガディールの南 100 Km の町 TIZNIT よりボルドーまたはリヨン方面を経てパリまで行く便を週 2 回運行している。何年か外国で働いた人達の中には、現地で車を買って特に夏のバカンスに帰国というケースが多く、この集落付近でもフランス等外国ナンバーの車が目につく。稼いだお金を元に商売を始めたり、家を新築したりしており、こんな山村にと思ふ家が何軒か建っている。この地での業務の背景には、こうした出稼ぎで得たお金が地方行政機関等へ政治献金として流れた為であろうと想像しても、決して不自然でないほど貧しいオアシス農業地なのである。

人家は北側斜面に密集し、石、土を主に、ヤシの木、径の小さな竹を建材として作られている。壁厚を 40~50 cm と厚くし、窓を少なく、また小さくしているのは特に夏場の暑さを防ぐためでもある。人家等の概念図を畫くと次頁の図のようになる。

水の便の良い、また平坦で木々の繁っている所に 1 軒たりとも家屋を建てないのは昔より、自然に育まれた姿なのであろう。

各畑への水の供給は、畑地最上段山側に設けられた seguia（北アフリカのかんがい用溝）より行なわれ、土地所有者別の分水箇所が要所要所に配置され、一定なルール（かつて seguia 敷設に際し出資したお金等の割合により取水時間が定められている）に従い、各自の畑へ水を流している。



この seguia の source（水源）より始まり、途中 bassin（貯水池）で水量の確保、及び送水のコントロールを行ない、下流へと続くが、その末端は自然消波している。大部分が索掘りであるが為に水の浸透量が多く、下流に行けば行くほど水量が少なくなるのと同時に、降雨期に破損が生じている。seguia に関する業務は水を有効利用し、より広い耕作地を開発する目的に立ち、既存のものを改修整備するものである。

半自然的なものを改修することによる弊害について、IDA-OUDRIFE で何らクレームが付かなかった。が ASSA という所では、一人の老人が工事の際生じる木々の伐採、工事完成後 seguia 付近にある木々が枯渇してしまうのでは、という不安を訴えていた。木とはナツメヤシの木であり、この地区での有力な財産なのである。それが枯れ、または切られる事により、ナツメヤシの実の収穫が減るのは当然、現金収入が減るのである。木の少ない南部地方では、その他アルガナ、オリーブ、アーモンド、アンズ等の木には、各々所有者があり、土地のそれとは必ずしも同一でない場合の方が多いようであり、おそらくこの老人は seguia 付近に多くのナツメヤシの木を所有しており、どこかでその弊害を見、聞きしているものと思われた。

索掘りのものを改修して得られる開発効果には、どんな場合でも何人かの利益が損われるものであり、広く見れば動、植物の生態系をも狂わすこととなり、この地でも形こそ違うとはいえ、一種の環境破壊に対する声を聞いたように思う。モロッコでの環境開発行政がどうなっているのか知らないが、

我が事務所の設計担当に改修計画、水路、底部の設計検討をすべきであるという意味も含め尋ねた事があったが、全くそのような事を考えておらず、「木自身の特性によりコンクリート化された水路底部に向け根が伸び割れ目を見出すので心配はない」というような説明である。ある一面では正しいと思うが、他方、施工管理、コンクリート品質管理、さらに付けば設計者自身が適正なコンクリート配合等設計検討を行っていない事を認めているのであり、話の途中でバカらしさを感じたのであった。

意識の低い人が多く、責任の所在が不明確、明日の事はインシュラーの社会構造の中で、この環境、開発問題はどのような過程を歩むのだろうか。

II Une petite proposition

まず状況説明を、次に書き始めてから1週間もかかってしまった苦心作、を示し、最後にその反応、感じた事、反省等を述べる事とする。

現地の村長とでも言い califat の職についている人が村中心部の建物、道路を主とした再開発的な要請をProvince TIZNIT に上げた。が、そこでは人材不足等の理由より出来ない為に、本来住宅省へ依頼すべきところを、我が事務所、TIZNIT 出張所へ依頼してしまったのである。出張所長は書類をアガディールへ転送、当事務所でも良く調べず、一つの業務と扱い、まずは平面図を作らねばならぬという事になったのである。

私が担当する事になり、アガディール出発前に情報等の説明を求めても、満足な答えもなく、ただ、「出張所長が知っている」との事だった。

が、その彼氏も良く知らず、現地で聞いてくれとの事であり、TIZNIT まですでに来てしまった事もあり、しかたなく現地へ行ったのである。どの地でも同じであるが、現地の実力者達に測量着手以前に挨拶に出向く。この際に宿泊施設の提供要請等を同行する助手達が行なうのが常である。が、挨拶の段階で、どうして農務省が測量に来たのか？との事となった。前述のようないきさつも捉えてないので、当然満足を回答を言えないのは当たり前であった。我々より相手の方が行政機構をよく知っていて、逆に教えられる始末だった。当然、地元のOKが得られず引き帰す結果となったのである。

日常生活でも、これと似たタライ回しの事はよくあり、特に通知がカギとなる料金支払、物の受け取りなど、責任の所在がうやむやになる。お金がからんでいるので困る。

しかし、これ以前に消化した多くの業務では、たとえ事前の情報、資料が

少なくとも、現場で仕事を実施するには支障がなかった。

ここで取り上げた提案とは、事前に情報、資料等を十二分に得て業務に取り組めば、各種のロスが減少し、業務がスムーズに行なえるという前提に立ち、業務調査を作成せねばならぬであろうというものであった。

Une petite proposition

J'ai l'honneur de vous adresser une petite proposition relative au résultat du dernier déplacement que notre brigade a effectué le 27 septembre 1978.

Il y avait eu un problème fondamental avant que nous ayons fait des ordres de mission à destination du Souk Tnine Ait Arkha dans la province de Tiznit. Les personnes qui jouent un rôle important ne savaient pas notre projet, et que nous avons reçu un dossier, arrivé d'Agadir le 14 septembre 1978, No. 1967. Malgré l'explication, nous ne nous sommes pas mis d'accord sur la bonne marche du projet. A cause de quoi? Je vais commencer à vous donner mon opinion qu'il a l'air de l'indiscrétion, pour nous faire une amélioration sur notre déplacement et nous-mêmes.

D'abord, je me permets de vous donner mon opinion personnel à propos de notre déplacement. Je sais bien que je n'ai pas dans la position de vous dire mon mot sur ce problème, parce que je suis un volontaire japonais (un membre de J.O.C.V.) qui participe au développement du Maroc, qui ne doit s'ingérer dans les affaires du pays.

Nous avons maintenant une très grande compétence en comparaison aux autres Service de l'Equipement Rural. Donc, il est indispensable de réduire le nombre des j o u r n é e s o ù o n doit aller travailler dans des lieux très éloignés, car nous n'avons pas de crédit suffisant. Bien sûr, c'est également à cause de notre travail dans l'administration civile.

Eh bien, si on n'a pas de renseignements de son travail à l'avance, c'est exactement de provoquer les pertes de temps, frais de déplacement, confiance pour notre Service etc. Bien que tous les chefs de l'organisme soient dans le cas de savoir tous les renseignements; au moment de recevoir une demande des autres sections, il est regrettable que quelques-uns soient mal informés dans l'état actuel des choses.

Par un déshonorant expérience, je pense qu'il faudra dresser un PROCES-VERBAL DE MISSION. Ce dossier sera inscrit par les chefs de position après avoir pris des informations contre projeteur qui nous donnera une demande. Je crois qu'ils le devront rencontrer, si tant qu'il n'y aura point de problème, pendant qu'ils feront un dossier.

Donc, on pourra empêcher un inutile déplacement avant d'écrire un ordre de mission.

Enfin, je suis désireux de vous demander des explications ci-dessus. Pour qui les fonctionnaires ont la charge de faire le travail? Je veux vous répondre toujours pour l'Etat, société locale et soi-même.

Veuillez agréer, Messieurs les chefs de l'organisme, l'expression de mes sentiments distingués.

SHIBUYA Munetoshi

AGADIR le 5, Octobre, 1978

この文を身近にいる人々、及び Le chef de service に見せた。前者での反応は、もっともだ、という意見がほとんどだったが、肝心な後者のそれは良くなく、「出張に出かけたにもかかわらず仕事をせずに帰る事はマジメな業務態度ではない」というような言葉ももらった。

今、考えると10月上旬は人事異動のシーズンであり、新規にモロッコ人 Ingenieur (Le chef de serviceより格としては上位)が赴任し、また長期にわたる出張旅費問題が頂点にさしかかっていた時期で、事務所内部からのつき上げが相当あったという。彼自身精神的にやすまる状態ではなかったようだ。

そこへ、上記のような、言ってみれば彼そのものを対象(その気は全くなかったが)に向けて書かれたものと取られても何とも言えぬ内容のものが入り込んだ為、いつもは笑顔で応対してくれる彼の顔のそれが消え、前述のような言葉と彼が解釈しているその業務の説明があり、終りの方で「他の者にこれを見せたのか?」と聞かれ、「あなたが最初だ」とうそをつくハメになってしまった。安心して笑顔に戻ったのを見ると、真に的を射ていた感じだが、彼のプライドを傷つけてしまい、家賃の一部が出張旅費として私に支払われるという前任者の路線にヒビが入り、仕事が回らなくなるかも?と日本的な心配をしたものだった。

現在まで、このような事件はないが、業務調書を作成すると当然責任の所在が明らかになるので、どうも彼等はこれをさげている様子だ。この件で、以下のことを考えた。

- (1) スジの通った提案等は内政干渉にならない。
- (2) タイミングが必要である。
- (3) 文の組み立て方と単語の使い方のむずかしさ。
- (4) 物事、相手にもよるが日本的な心配は、思っているほど具合悪い方向には進まない。

などを感じた出来事であった。

日本に帰って考えること

渋谷 宗利

アガディールは、首都ラバトより南西約620Km、太平洋に面した温暖な気候の街である。アトラス山脈の山々を主な水源とする河川、OUED-SOUS、の末流が街の南方に位置する。市街地より北西方向に小高い（ベルベル語の、アガディールの意味）山並みが大西洋に消え、地形的に小規模な入江を形成している。これらの事は港として好条件である為、古代フェニキア、カルタゴの時代には寄港地として使用されていたことは、紀元前500年頃、カルタゴの提督ハノンによるジブラルタルからアフリカ西海岸への探検記録から推測できるといわれている。その後、本格的に居住が開始されたのは、1505年のポルトガル人によるものである。

1960年1月29日夜マグニチュード5.7の地震による被害を受けた時を境に、この街は変貌した。政府の観光政策を含めた都市計画がなされ全く新しい街となった。従って、この地には旧市街（メディナ）はなく、他の多くの街と異なるスマートさがある。

この様に西欧的に都市化し、社会施設等々思われた環境の中に私の生活基盤があった。所属事務所は、まさにその中心部に位置し、南の地方で行なった業務の整理等、内業を主体とする際は都市型隊員の姿であった。

アガディールを離れて行なり南の村々での出張業務（現場）では毎回といってよい程、その土地の人々より食事、宿泊施設等の提供を受けた。業務が地元にとって身近な問題であればある程、それら物的提供に加えて人的なそれがあった事には、より有難さを感じたものであった。やはり現場ならではの姿なのである。

業務に対する地元の関心度は、クレーム等の形として多かれ少なかれ出ていたはずであったが、直接耳にしたのは内容の異なる2件だけであった。地方行政機関のスタッフとして明確な執務分担が確立している組織の中で、常日頃接する機会の多い助手達と共に行なり業務の中に技術協力、指導の第一歩がある。顧みれば、私の2年間の多くは、この域を脱する事が出来なかった様である。

任期終了も間近い頃報告した中で、次のようなことを書いた。それは測量という業務を行なう地域の住民とのかかわり合いである。各種クレームが出るという事の内には、それぞれ、それなりの背景、原因があるはずで、単に一つの出来事的に捉えてしまえば、そこですべて終わってしまうのである。

職務分担、責任の枠を越えた提言等をする事により問題解決の糸口が見い出せる。と同時に地元とのかかわり合いがより深くなり、彼らの心情、慣習等も理解することができるのである。この事をたえず念頭に置いて日常の業務に臨むべきであると今さらながら感じるのである。



測量の現場。群の地帯にある測量地



作業を終えての憩いの場。イド・イブリフにて

渋谷隊員の報告書を読んで

布 施 進

本報告書は着任以来第4回目の1978年5月～1979年1月の9ヶ月間のものであるが、その間に実施した作業内容に関する事項がないのは本期間において特に報告すべき作業がなかったのか、または前3回に報告済みの作業と同一であったために省略し、同期間において経験した最も異例な出来事について、同隊員のとった処置と、それに対する受入機関の担当者の反響について述べられたものであろう。内容に対する所懐は次のとおりである。

(1) オアシス農業地について

作業地域で行われている“かんがい用溝”の改修整備工事の植物への影響を心配している一老人の提言に対し、これを環境破壊と考えこれに対する環境アセスメントの処置が行われているかどうかを調査したが、担当者の説明は不十分であったということのようである。この問題について配慮した心構については理解出来るが、どのような工事についても利益の面と不利益の面があり、前者の方が多ければ実施の効果があると考え、不利益を受ける者に対しては救済策を講ずるのが一般的な考え方であるが、モロッコの国情では通用するかどうか問題である。細い事でも改善すべきだという考えは正論ではあるが、正論を具体化するためには種々の壁につきあたり、そのために精神的な打撃を受け、他の本来の仕事の遂行に影響するようなことがあってはいけない。また、この問題は本隊員の本来の仕事の範囲内であるかどうかについても考える必要があるのではないか。もし範囲外であるならば、その対策に対する不満についてあまり深刻に考えない方がよいのではないだろうか。

(2) “業務調査”の提出について

この問題はある地方の村長から申請された再開発的な事業に対して必要な測量を本隊員が担当することになり現地に行ったが、現地民の了承を得ることが出来ず、測量をやらずに帰った事について、今後このような問題が起らないように責任の所在を明らかにするための一方法として“業務調査”なるものを上司に提出したところ多少のトラブルがあったが、効果はあった。しかし、これについ

ては次の点を考慮する必要がある。すなわち(i)提案はスジの通ったものでなければならぬ、(ii)提出の時期を考慮する必要がある、(iii)文章の作成が難しい、(iv)効果は提案の内容及び提出する相手による、ということである。

この問題の経過をたどると、まず第一に申請書類を受理すべき役所が住宅省であるのに、アガディール州農業局のT I Z N I T出張所へ送られてきたものを出張所をよく調べずに受理し、アガディール州農業局でもこれを受理したことに原因があり、日本では考えられない誠に珍しい事件である。しかしモロッコ国ではどうであろうか。本隊員は出発前に作業の内容を知るため担当の上司に説明を求めたが説明が得られず、さらに出張所に行っても同様であり、現地に行って住民と折衝して初めて本作業は農業局の所管でない事が判り、作業を行わずに帰ることになったようである。

このような理由で本件は隊員の手落はなく上司の処置が悪いために生じた事であるので、今後このような事が起らないように、やむなく“業務調査”なるものを作成して提出する事にした心情は理解できる。また、その措置が効果があった事も事実のようである。しかし本隊員が感じているように効果は提案の内容及び相手によるものであり、これに対する適正な判断を下すことは易しいことではない。特にモロッコ国の国民性を考慮すると、今後もこのような処置が効果があると考えられるだろうか。むしろ逆効果が生ずることも考えるべきであろう。文章というものは将来に残るものであるから、特に責任問題に関する事項については文章によらず話し合いの場で解決するように努力したほうがよいのではないだろうか。(青年海外協力隊技術専門委員＝測量)

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し、数多い報告書を、どう分類し、いかに活用するか、いろいろ意見がありました。隊員の活動を広く紹介する観点から、今回は国別編とし、昭和54年度、55年度の2カ年で全派遣国編を完了させる予定とし、その後、順次、違った角度で報告書集の作成を継続する方針で臨みました。

国ごとに収録した報告書の数も、諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし、職種の配分などについても、それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかなど、不十分な点もあろうかと思いますが、とりあえず発刊に踏み切りました。

ご活用下さる皆様がたのご意見、ご提言をいただきつつ、今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら、この報告書のために、ご多忙中にもかかわらず、積極的にご協力いただき、報告書に対するコメントをご執筆下さった技術専門委員の方がた、ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられた帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、本報告書集のご活用にあたり、他への転載等を企画される場合は、青年海外協力隊事務局（啓発課）に必ずご相談下さるようお願い申し上げます。

昭和55年3月

啓発課長 高橋成雄

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録 <モロッコ編>

昭和55年3月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話(03)400-7261(代)

印刷所 日青工業株式会社

[非売品]

